

639

134



\*0054556000\*

2

0054556-000

639-134

伊那の伝説

岩崎清美・著

山村書院

昭和8

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。



531





岩崎清美著

伊那の傳説

山村書院刊行





639-134

## 小序

爐邊に耳を傾けて、村々の人たちの話を聞いて居る間に、世間普通の學問からは、さまざまな名目の下に排斥せられてしまひそうな話のうちにも、いろ／＼な意味に於てしんみりと考へて見なくてはならない物が大へんに多かつた。長い間に聞き集めたそれ等の話を、取り止めもなく書き捨て、置いたものが、大正十一年の町の大火で、私の家も半焼けの災難に罹つた時、駆け付けて来て呉れた人たちの手で、危ふく火の中から取り出された家財の中から發見せられた時は、まことに感慨無量であつた。それが因<sup>もと</sup>で、そのうちの特に傳説に關するものだけを取り出して『傳説の下伊那』を刊行したのは大正十二年の夏であつた。

それからして今日まで、もう十年の餘にもなる。その長い間、私は矢張り以前と同じやうな心持ちで、黙つて人たちの話に耳を傾けて來た。

その多くの話の中には、その土地に初めて發生して、次第に成長して來たらしいものもあつた。或は又遠くの國から遙々と、幾つもの山坂を越えて來て、此所に根付いて村の花と咲い



たものもあつた。而かも其のどれもこれも、皆村の人たちが長い間、口から耳へ語り傳へて來た懐かしいものばかりであつた。

十年餘の前に一度書いて置いたものが、一つも残らずになつてしまつた今日になつて見ると、今一度、私たちと同じやうな心持ちの人々といつしよに、そう云ふ話を憶ひ返へして見たくなつた。

私は今日の多くの村々が、祖先の代から長い間傳へて來た尊い懐しいものを、次第に失ひつゝあるのを見て、まことに惜いことに思つて居る。それで私は茲に再び前回の缺を補つて、上伊那郡に屬する若干の話を附け加へたものを書くことにしたのである。

話には一々その村名だけを掲げて、郡の上下の區別は省いて置いた。それを一々ことわる必要もないと思つたからである。

昭和八年七月

岩崎清美

## 目次

樹木に關する話.....	一
杖立ての木.....	一
逆さ銀杏 逆さうつ木 姿見池の柳 犬房丸屋敷の枿の木	
樹に宿る精.....	七
開善寺早梅の精 二本松の絲櫻 蛇柳 お清牡丹 芍薬塚 白女様	
崇りをする樹.....	三
お萬様の藤と夕顔 網掛峠の蛇瘤杉 月瀬の大杉 小園の古櫻 鷹待ちの大藤	
靈松一本松 圓座松 天狗の森 血の流れた一本杉	
いろくの樹.....	三五
赤兒の泣く二本松 呼ばり松 立石の雌杉雄杉 晴明櫻 有作桃 地團太の松	



美女が森の御影杉

怪火の話……………四二

お玉の火 おかやの亡魂 入道ナギの火玉 夫婦火 犬房丸のともし火

狸和尚の話……………五二

狸の繪像 建長寺様

河童の話……………五七

家傳通風藥 河童の綱曳き

神様に關する話……………六〇

おさわ様の由來 足神様 尹良親王を祀る家 清内路のお竹様 頭權現様の由來

修驗者に祀られた佐倉様 白狐を祀る愛宕の稻荷 跛山の神の片足草鞋

南京茶椀の若宮八王子 御靈八社の神 關八幡 木澤の愛宕様 一本さま

弓矢天狗の話 大蛇を殺した犬神様 風の神の三郎様 滿仲を助けた八幡様  
大六天神のお宮 高鳥谷山の猿田彦 熊野三社の大鉞 熱田神社と大蛇の骨  
守屋神社 千鹿頭明神 龍宮塚の椀貸穴 聖權現 樋口の八王子社

人身御供の話……………六〇

靈犬早太郎物語 姫宮の狒退治

湖沼に關する話……………六六

水と蛇……………六九

蛇出しが池 蛇峠の池 とうちやげの池 檜原川の甌穴 黒石明神 瀬戸淵の主

大蛇が池 畑た池の女 野が池 大蛇が城 深見の池 その一 その二 その三

その四 その五

水の不思議……………七三



清内路の赤兒が淵 左京の赤子淵 機織り淵 和泉が淵に沈む鏡 飲まぬ水 涙霧  
かむろ水神 駒が池の椀貸穴 あめ鱒さらばよう あめ鱒岩の女 徳本清水の話

金 鶏 の 話……………一三四

井戸で鳴く鶏 鶏淵 開眼寺の銀杏の樹 朝日松 南宮神社の森附くれ木踊り歌

湧 泉 の 話……………一四二

酒の湧き出た酒生澤 初澤の皇泉 土佐守の一杯水 鹿塩の塩泉

佛 様 に 關 する 話 ……………一四六

木槌の薬師 山の寺の小佛様 佛手庵の由来 蓮佛 一生に一度の一と言観音様

横すら薬師 殿様の眼を治した十二薬師 眼病のお参りする六地藏 火事の中から

逃げ出した熊野本尊 行人様の話 火定様の話 和仁が淵から出た観音様 日切

り地藏 桂泉院の白龍 錢不動 護國寺の地藏様 日蓮の經石

蛇 婚 の 話……………一六九

矢野の大池の主 鰐が淵 成瀬が淵の女 清内路の蛇塚

沈 鐘 の 話……………一七六

文 永 寺 の 釣 鐘 ……………一七九

だんく大きく変わった話 乙女夢枕に立つ話 水の中から呼ばつた話

金の板が釣鐘になつた話

其 の 他……………一八四

耕西寺の鐘 釣鐘淵

い ろ く の 石……………一八五

石 成 長 の 話……………一八五

袂の中で大きくなつた石 富士石 石観音様



手形石の話……………一八九

御手形石 鬼が手を突いた疣石 雷様の手形石

切り石の話……………一九三

切り石の由来 辨慶が割つた夫婦石 辨慶に切られた石 刀痕石

馬蹄石の話……………一九七

長石寺の駒の足跡 源平兩軍の足の跡 駒つぶれ 駒の蹄石 豊後岩 天狗の足跡 水神様の足の跡

夜泣き石の話……………二〇三

子泣き石 夜泣き石 千人塚の赤子石 靈神赤兒石

不思議な石いろいろ……………二〇八

立石寺 甲賀三郎と犬石 瘡に罹る瓢箪石 蝮石 米喰ひ石 化け石 三つ石と

小猿 乳母が懐の股引岩 ハブチ稻荷の蠶石 浮き石 鸚鵡石と木魂石

神様に祀つてあつた石 明神様の腰掛石 善光屋敷のお腰掛石

地名縁起の話……………二二三

駒場と駒の牧場 晝神と日本武尊 横旗の信玄塚 神原の將軍塚 便りが島

烏田の哀話 地藏澤 ケチ田(病田) 阿彌陀田圃の如來様 杵が塚の話 蛇が澤

の大蛇 杵原と箱川箱淵 血流れ澤 矢立て木 御子谷 辰野と樋口

炭焼長者の話……………二四〇

園原の伏屋長者……………二四二

炭焼き喜藤治 鶴巻き淵と黄金岩 長者免許状の事 朝日松 守り本尊の薬師

如來 はき木 姿見池 駒繫ぎの櫻

金原長者の話その他……………二五二



巨人の話……………二五三

デラボッチャ 尾科豊後

土中誕生の話……………二六〇

鎌倉権五郎と片目のいもり……………二六三

鈴虫の名所お蝶様……………二六五

戸倉山の婆……………二六六

狐が落した寶珠の玉……………二六八

光國和尚の守り刀……………二七一

寶刀青蛇丸の話……………二七二

瑠璃寺の青獅子……………二七三

飯田鳥……………二七四

餅搗かぬ家……………二七七

高粱を作らぬ家……………二七九

二つ山と嫁入りの話……………二八〇

眞菰が池の鴛鴦の話……………二八一

その一 その二

狗賓に浚はれた稚兒の話……………二八六

石屋さ駒場……………二八七

大蛇退治の話……………二八九

殺された大蛇の祟り……………二九〇

言ひ習はし……………二九三



伊那の傳説

手  
毬  
唄……………  
三〇六



樹木に關する話

杖立ての木

餘程上手に植えないと、とうてい付きそうにもない木が、それが至極無造作に根付いて成長したと云ふ話、而かもその木が山からこいで來たのではなくて、諸國遊行のすぐれた坊様たちの突いて居た杖の木であつたと云ふ話は、不思議な事ではあるが、諸國到る所に廣く行きわたつて語られて居る。國々に今日残つて居る類似の杖の木を寄せ集めて見ると、弘法大師、日蓮、親鸞と云ふやうな高德の僧たちは、行く先さへで杖を地に差して歩いて



居る。そしてそれ等がいづれも皆根を下ろして立派に成長して居ると云ふのであつた。  
杖の木であれば技は自然に下の方へ向いて伸びて行く道理で、それが逆さ木と稱ばれる所  
以であつた。

### 逆さ銀杏

大鹿村字鹿塩入澤井の圓通殿觀音堂の境内にある大きな逆さ銀杏、百年程前に圓通殿が火災  
の砌り、焼け損じて幹の一方に穴が出来て居るが、此れも矢張り其の杖の木であつた。  
むかし諸國遍歴の弘法大師、銀杏の杖を突きながら遙々と此の山の中へ巡つて來た。そして  
賤山樵しづやがの貧しい生活くらしに搗かて、加へて塩の乏しいのを憐れがり、手にした杖で傍の岩の根元を  
突くと、其處から忽ちに塩水が湧き出した。その水滾々として何時の世にも盡さず、それが今

の鹿塩の塩の泉となつて只今以つて流れつゞけて居る。弘法大師はそれから其の杖で茨を分  
けつゝ澤井まで行き、其處にその杖を地に突き差して置いて去つた。その杖不思議にも青々  
と芽を吹いて、今日の巨木になつたと云ふのである。

その逆さ銀杏の古い樹肌から、乳房に似た瘤が幾つとなく下がつて居る。その皮を剥ぎ取つ  
て來て煎じて飲めば乳がよく出ると云ひ傳へ、乳の少ない母親たちはわざわざ遠方からでも  
其の皮を採りに來るそうである。

### 逆さうつ木

杖の木の不思議は會地村の駒場にもあつた。昔西行法師が諸國遍路の途中、逢地むちの關まで來  
て其處へ突いて來たうつ木の杖を地に差した、そして『此の杖に芽の出る頃には無事に都へ



歸つて居ませう』と云つて立ち去つた。その杖がやがて其處に根を下ろして枝葉が茂り、美しい八重の卯の花が咲き亂れた。齒を病む人が、そのうつ木の根元へ糶穀を撒いて願ねがをかけると不思議によく治ると云ひ傳へ、其處には絶えず糶穀が撒かれて居つた。うつ木はそれからして逆さのまゝに生ひ茂り、毎年美しい花が咲いた。而し何時の代かに其のうつ木は枯れてその跡へ

卯の花やくらき柳のおよび腰

の句を刻んだ碑が立てられた。駒場を昔卯の花の里と稱んだと云ふのは、此の逆さうつ木のあつたためだそうである。

## 姿見池の柳

智里村字園原の名所、姿見の池の畔の柳の木も矢張り初めは杖であつた。

京都のある公卿家の姫君、住吉明神の靈夢によつて遙々信濃國園原の里に炭焼の吉次きちじを尋ねて來てその妻になつた。後に伏屋長者ふせやとなつたのが即ち此の夫婦である。此のお姫様は都の生れでも顔はまことに醜かつた、それでも鏡と云ふものゝない昔の事、自分も他所よその女の子の様に美しいものと思ひながら、柳の枝を杖に突いてはるゝと此の園原へ辿つて來た。そして偶然にも途中で相手の吉次に出會ひ、我が身の素性を明かして吉次の家は何處だと尋ねる。意外の話を聞いて吉次は大いにびつくりし、園原の吉次は即ち自分だと名乗る。京の姫君、折角遙々と尋ねて來た吉次の姿の炭に煤けて穢けないのを見て力を落し、歎息もして傍を見る



と其處に小さい池があつて、その水の面に映つた自分の顔の吉次にも劣らず醜いのに初めて氣付き、此れも住吉明神の御引き合はせと諦めて、そこで吉次の妻となつた。その時都から突いて來た柳の杖をその池の傍に突き差したのが、そのまま其處に根づいて大きな柳の樹に成長したと云ふのであつた。

其の後に至り、故あつて其の池を埋め、柳の樹を切つたのが祟りをしたために、又その近くに池を堀り、その端へ一本の柳の樹を植えて置いた。

### 犬房丸屋敷の栃の木

西春近村小出の字花田に、昔工藤祐經の一子犬房丸ぬねぼうまるが流されて來て住まつて居たと傳へられる屋敷跡があり、其處に周り七抱へにも餘る栃の巨木があつた。明治の初めに焼け損じて今は

もうなくなつて居るが、枝が皆下へ向いて伸びて居た。土地の物識りに古い時代の話を聞くと、昔犬房丸が島流しになつて伊那へ來り、片桐家へお預けと云ふことになつて狐島の地を捨て扶持に貰つて居た。後に小出へ屋敷を構へ、其處で一命を終へた。今その跡に犬房丸の塚と云ふのが残つて居る。此の栃の木は犬房丸が初め此處へ來た時、突いて居た杖を地に差して置いたのが此のやうに成長したのだと云つて居る。

### 樹に宿る精

人の精が樹に宿つて、さまざまの奇瑞を示したと云ふ話、或はこれとは反對に、樹の精が人に宿ると云ふやうな話は、到る所で語られて居る。



柳などの樹の精が人と現じて、不思議を世の中に示したと云ふ話は、晉に紀州熊野の柳ばかりではなかつた。紀南郷導記には『楊枝村、此所に淨樂寺あり、往昔京洛三十三間堂の棟木を伐り出せしと也、是れ柳の木にてありしと也』とあるが、本當の棟木は實は此れではないそうなる。而し此れ等の記傳などから脚色された『棟木の由來』

むざんなるかなおきな稚きものは、母の柳を都へおくる、もとは熊野の柳の露に、そだて上げた  
るそのみどり子が ヨイ／＼ヨイトナ

季仲が鷹狩の日に、鷹の足緒が柳の樹の枝にかゝり、數多の武士に今にも伐り崩されて、やがて枯れんとしたものが、平太郎の矢先きの手柄で鷹も助かり柳も救はれた。その日の恩に報いんと、柳の精が美女のお柳となり、平太郎に連れ添ふて一子みどり丸を生んだ。そのお柳がやがて懐しい夫平太郎とみどり丸とに涙の中で分れる所に、この『むざんなるかな』の一節は生れたものであつた。お柳は美くしい柳の精であつたのである。

### 開善寺早梅の精

樹の精が往々にして人の姿に現じたと云ふ話は、熊野の他にも到る所に傳へられて居る中に、茲に川路村開善寺の書院月香寮の庭先きに、昔有名な早梅の樹があつた。寺傳によれば延元元年小笠原貞宗、雪中に此の梅花を時の帝後醍醐天皇に獻す、天皇叡感斜ならず、信濃は寒國と聞けるに、雪中已に此の花を着くるは皇運發展の瑞祥なりと喜ばせ給ひ、勅して信濃梅の名を賜ふ、と云ふのである。信濃梅はそれからして四方に名高くなつた。

天文の頃の話であつた。甲斐の軍勢が伊那に攻め入つた時、その中に埴科はこしな文治と云ふ、戦國の武士に似合はぬ風流な男があつた。晉に聞く信濃梅の話の不圖思ひ出し、ある日家來も連れずたゞ一人、こつそりと開善寺にその早梅を見に行つた。春もまた早い頃なのに、さすが



名に負ふ早梅は已に眞白く咲き誇つて香しく匂つて居た。文治はひどく感じ入り、じつと花の香に見惚れて居ると、其處へ何處からともなく一人の美女が現はれて来て立つた。

ひゞきゆく鐘の聲さへ匂ふらん

梅咲く寺の入り相のかね

文治が即興の一首を口誦さむのを聞くと、その女は文治に軽く會釋して

ながむれば知らぬ昔の匂ひまで

おもかげ残る庭の梅が枝

と、やさしい返歌をさゝやいた。文治は不思議な女もあるものかなと思つた。文治は女に導かれるまゝに寮へ上つた、そして其處で思はぬ款待を受けて陶然として酔つた。

袖の上に落ちて匂へる梅の花

梢に消ゆる夢かと思ふ

文治がも早や座に堪へぬ程に酔つたのを、女は美しくじつと眺めて居たやうであつた。

夕ぐれの風に文治が酔より眼を醒ますと、其處には先きの女の姿も酒の香りも消えてなくなつて、たゞ早梅がたそがれの光の中に白くほのかに動いて居るのみであつた。女は文治の前に美女と現じた美しい早梅の精であつたのである。

## 二本松の絲櫻

飯田の藩主堀家代々の祈願所であつた普門院、明治の初年に廢止となつて今では跡ばかりになつて居る。その當時の境内、今の二本松の廓の入口に、昔絲櫻の巨木があつた。もう朽ち果てゝ名残ばかりになつて居るが、その古木にむかし美しい女の精が宿つて居た。

昔堀家のお城に一人の美しい腰元があつた。同じ勤めの御近習と、不圖した袖のすれ合ひ



が縁となつて馴れ初めてから、行く末かけてと誓ひを立てた女の心は深かつたが、昔の家中の御法度は今日よりも固かつた。御近習には早くから定められた許嫁の娘があつた。とても遂げ得ぬ戀と諦めても、なほ諦めかねた腰元の女はそれからして七日七夜を泣き明かす。それから間のない事、一人の美しい女が裾を亂して町をさ迷ひ歩くやうになつた。美しく花の咲く春の陽の下を、唄ひながら笑つて行くかと思れば、やがて又さめくと泣いた、それは戀に破れた腰元の女の狂へる哀れな姿であつた。寺のお庭の絲櫻が、寺一面を満開の花に埋めて、風が吹けばもうちら／＼と散る頃であつた。ある朝、絲櫻の根元の散つて來る花片の下に、自害した美しい腰元は冷たくなつて横はつて居た。

それからして幾日か経つた後、雨のそぼ降る夜を其の絲櫻の樹の下を通る人の頭の上で『お笠まいろう、お笠まいろう』と呼びかける艶めかしい女の聲があつた。それは死んだ腰元の美しい聲そのまゝであつたそうなる。思ひ焦れて死んで行つた美くしい女の魂が櫻に宿つて、

その精が女の現し身に現じ、通る人を懐しがつて其のやうに呼びかけたのであつた。

## 蛇 柳

柳の木の下へ出るのはいつも幽霊ばかりではなかつた。川路村に昔貝鞍が池と云ふ大きな古池があつて、主の大蛇が住むと云ふので人たちは皆怖がつて居た。夜になつて其の池の畔を通ると必ず何かの變事があるので、今は其處を通る者もなくなつた。ある日一人の侍が來てその話を聞き、拙者がその變怪を退治して進ぜようと、眞夜半頃一人でその池の畔へ來て見ると、朧月夜の光の下に池の水がさゝ波立てゝひた／＼と岸を打つ、その向ふに當つて薄黒く、物の佇む氣配が見える、近付いて窺ふと若く美しい女が一人、岸の彼方に小手をかざして招いて居る。話聞いた池の主、魔性の女は此れかと知つた侍は、腰の一刀抜く手も見せず



斬り付けた。女は見事に眞二つと思ひの外、刀は何の手應へもなく空に流れて女の姿が消えた。そしてその後にはたゞ風にそよぐ波の音ばかりで何の異變もなかつた。侍は不思議に思ひつゝ其の夜を待ち明かした。その翌朝、急いで池の畔へ来て見ると、人を斬つた跡形は更になくてその代り、岸邊の太い柳の枝が見事に切り落されて居た。池の主が岸の柳に姿を替へて美女となり、夜なく通りがかりの人たちに戯れて居たのであつた。蛇柳と稱ばれて居るのが即ち此れである。

## お清牡丹

遠州の國境から天龍川を溯ること十里あまり、船が龍丘村の時又から南宮に向つて下る途中、天龍川の水が絶壁の下に淀んで流れ行く所に、お清牡丹の物語りが今も尙ほかすかに語られ

て居る。遠州の氣多川を流れると云ふ京丸牡丹の物語りと同じやうに、此處にも大きな牡丹の花片が天龍川の川瀬を流れて行くと云ふのである。

お清牡丹の確かな場所は今以つて明かでない。千代村の年寄りたちに聞くと、それはおきやう山の話かも知れぬと云ふ。秦阜村梨窪の池野神社の古風な神踊の由來には、昔平家の落武者此の地に安住して氏神を祀り、昔を偲んで一夜を語り明かした事が元であると云ふから、此の物語はいづれ此のあたりに成長したものであらうと思ふ。

都に遠くして山深く、而かも氣候暖かに、四邊の至つて長閑な此のあたりは、都の落人などの來て隠れ栖むには屈強の所であつた。今日でもそう云ふ話が諸所に語り傳へられて居る中に、茲に、此れも平家の落ち人が一人、遠い旅路に行き悩む若き武士が、都のいくさの名残かも知れぬ、痛ましく傷をつゝんで細くと、山路を踏み分けて此の山里に辿つて來た。

村の長者のなにがしは此の哀れな旅人を憐れみ、吾が家に連れかへつて看護の手を盡してや



つた。心盡しの甲斐があつて、やがて武士はもとの勇ましき姿にかへる。徒然つれづれの折柄には都のいくさ話もしたであろう。京六波羅の榮華の話も出たであろう、そして美しき娘のお清との戀もその間に次第に實つて行つたであらう。

平和の村は二人の夢を幸福に包んでその年も暮れた。山に居て都の春を偲しのべば、徒らに思ひ出づることのみが多かつた。心は後に残りつゝも、今一度都に歸らねばならぬ若き武士は、お清に再會の固き誓を残して春殘き頃に都へ去つた。そしてその後には再び父と娘との二人の淋しき生活が残された。

父は娘によき婿を得て早く安心がしたかつた。而かしお清は父の希望に其のまゝ従ふわけにはゆかぬ、さりとて都の武士との誓を父に告げて、許しを乞ふことの今更に出來ないお清であつた。今はも早や父のすゝめを拒む口實さへも無くなつたお清は、父に最後の願ひを語る。彼所かしこの斷崖の頂きに、一輪咲ける牡丹の花を、妾のために手折つて來る人があつたなら、そ

の人をこそ妾の夫に定め給へと云ふ。

幼くして母を亡くしたお清には、天地にも替へ難き一人のやさしい父である。さりながらお清の抱く小さい胸には包むに餘る涙があつた。慈愛の父も秘めたるお清の涙は知らず、これもいとしい吾が子へのなさけであろう。父は娘の此の切ない願ひを聽いた。

父は己が選べる若者に此の旨を傳へてやつた、今日は愈々定められた其の日であつた。高き絶壁が淵に臨んでそば立つ所、緑の苔が石の面を染めて、逆さまに巖の影を落とす、淵の底に咲く花はまことの牡丹の姿にあらず、お清が美しい眉をあげて指さす方に大輪の牡丹が一つ、高く聳ゆる絶壁の頂に物狂はしく咲き誇つて居るのが見える。

一人は事のならん事を願ひ、一人は事の破れん事を祈る。互に相異なる思ひを抱く父と娘は相伴つて此れも巖の下に立つた、そして其處に、思ひがけなくも春早く都へ去つた若き武士が、誓ひを守つて再びお清の許へ歸つて來た。今は二人が牡丹を採りに行くべき運命となつ



た。二人は険しい巖を登つて行く。

運命の花は誰の手に、と考へる時、お清は堪へられなくて二人の後を岩に縋つて上る。やがて武士は早や花の近くまで辿り着いた。今しも手を差し伸べて牡丹の花に觸れんとすれば、何事ぞ、牡丹の花が俄かに崩れて花びらが武士の顔に散りかゝる、と、武士の體は毬の如くに巖を離れて眞逆様に、花びらと一しよに天龍川の淵の中へ落ちて行つた。それを見たお清は、それに誘はれるやうにして、つゞいて同じ水底に身を投げ入れた。二人は斯うして牡丹の花びらと一しよに天龍川の藻屑となつて沈んで行つたのであつた。

大輪の牡丹の花びらが、其の頃になると天龍川の波の上を何處からともなく流れるようになつたのはそれからであつた。娘の名がお清であつたので、土地の人たちはその牡丹の花をそう云ふ名前で稱ぶことになつたのである。

## 芍薬塚

下條村親田區おやだの中の平にある芍薬塚、毎年五月の頃になると茂りはびこる芍薬が塚一面を被ふて美しく咲き亂れる。昔城主下條信氏の息女芍薬姫が波合に赴く途中で病氣に罹り、此の地で歿したのを村人たちが懇ろに此處に葬つて墓の標に其の名に因む芍薬を植えた。塚に茂るその芍薬が他所よそのに増してそればかりあのやうに美しくしいのは、姫の魂が此の世を慕ふて花に宿るためだと云はれて居る。



## 白女様

大鹿村の大河原は、その昔後醍醐天皇の皇子宗良親王が長く立て籠つて回天の偉業を謀り給ひし處、その舊跡の今日多く遺つて居るうちに、宇上藏の地に御子尹良親王の妃、美濃后のお墓と云ふのがある。それがまた妃の墓と知れなかつた頃の話である。

其處に太い柏の木が一本あつて、その下に名も知れぬ古い石碑が一つ、たゞ尊いお方のお墓だ位に考へられて居た。その柏の大樹の周圍を七回りすると、長い黒髪を肩にすべらし、素絹の衣を着た美しい女が、細い指に珠數を爪繰りながら現はれて來ると云ふので、人たちはそれを白女様と云つて怖がつて居た。ある年の大風の日に其の柏の大木が吹き倒されて、その時漸くにしてそれが妃のお墓と云ふ事が知れ、香華を手向けて懇ろにお祀りをして上げた

ので、白女様はそれきり出ないやうになつたと云ふ。

## 崇りをする樹

## お萬様の藤と夕顔

敵に攻められて城の落ちる時にはいろ／＼の憐な物語が何處にも澤山に傳はるものである。茲に大下條村和知野の城主關盛永は父安藝守春仲と共に、天文十三年八月十三日、下條時氏の不意討ちにあつて戦死した。城を逃れた奥方のお萬様は、一子長五郎を抱いて波合の方へ落ちて行く途中、縁の者と氣を許した案内者の惣十郎に神原村の大河内で殺された。村の百



姓たちは此の無惨な二つの亡き骸をひそかに葬つて、その墓標に一本の藤の若木を植えて置いた。その藤成長して今日では高さ數十尺にも伸びて居るが、毎年咲く花の色は他のにまさつて濃い紫の色である。それはお萬様の非業に死んだ魂の咲く色であつた。お萬様親子を殺した惣十郎の家は代々崇りがつゞいて、やがてその家は絶えてしまつたそふな。

今お萬様の藤と稱ばれて居るのが即ちそれで、その藤の木の下に在るお萬様の墓には

惠日院梅關悟春大姉 俗名關安藝守春仲息女

關お萬二十七 若君長五郎之墓 とある。

○

此れも關氏歿落の折の話である。住み馴れた和知野城の焼け落ちるのを顧みながら、お萬様は五歳の長五郎を背負ふて煙の下を逃れ出た。旦開村あまひの新野たひのまで漸く落ち伸びて來た時、泣き叫ぶ吾が兒のために路傍に咲く夕顔の花の美しくいのを一輪、お萬様には何の意趣もなか

つたけれど、これも落ち人の悲しさであつた。花の持ち主はそれを見て花盗人と罵りながら、子供の手から情なくも夕顔の花を奪ひ取つた。子供はお萬様の背中の上で聲を限りに泣き叫んだ。お萬様はどんなに人の無情を恨んだことか

『此處の夕顔に、來年若しも花が咲くならば、私の恨みで眞赤な色に咲かせて見よう』

お萬様はこう云つて泣いたと云ふ。

その次ぎの年、忘れた様な頃になつて又夕顔の花が咲いた、而かもそれが不思議にも眞赤な色であつたので、初めて去年のその日の事が思ひ出された。その家では崇りを恐れてそれ以來夕顔を作る事を止めた。赤い夕顔の花は本當にお萬様の崇であつた。

○

お萬様についての話は此の他にまだ一つ。

お萬様が落ちて行く途中、子供のために村の百姓にたのんで畑の瓜を一つ貰はうとした。そ



の百姓は敵方の女と見てか、その瓜は苦いから食べられないとすげなく断つた。お萬様の母子はやがて敢なく殺された。それから後、其處で作る瓜は食用にもならぬ程に本當に苦くなつてしまつた。

非業で死んだお萬様の恨みは盡きず、いろ／＼の崇りをするので村の人たちは恐れて墓を造り、社を建て、神に祀る、關の八幡が即ち此れである。そして毎年春の祭りには人形を造り關のお萬と云つて三河へ送る事になつて居る。

### 網掛峠の蛇瘤杉

非業で死んだ人の魂が、墓に植えられた樹に宿つて、禍を人に與へた話は網掛峠の蛇瘤杉にもあつた。

智里村字小野川の奥に當つて高く聳え立つのが網掛峠、古道の跡と稱し、其の頂きに祀られる網掛三社大権現のお祠の近くに蛇瘤杉がある。傳へられる所は次の如くである。

昔近江の國琵琶湖の畔に住む網元の善平は、律氣者で通つた漁師であつた。濱中の仲間からは親分と立てられて評判特によく、持ち船の数も多く家も榮へて何不足のない善平であつた。此の善平に一人の美しい娘があつた。近在に並びない器量よしで、それにもう年頃になつて居た。濱の若い者たちが嫁に欲しいの、婿になりたいのと、夢中になつて騒いで居る中に、娘の胸に何時の間にか影を宿した隣り村の若い漁師があつた。親もなく兄弟もなく、天涯にたゞ一人、酒と女に戯れる濱の若い者の仲間にも入らず、朝は早くより夜はおそくまで、一人せつせと稼ぐのを、善平の娘の何時ともなく見るうちに、初めに寄せた同情はやがて男を思ふ心になつた。語らぬ戀を胸に包んで幾日か経つ間に、父の善平は娘によい婿を捜して居つた、娘は父に語らねば、父は娘の心を知る由もない。



やがて父の捜し求めた婿が決まり、祝言の日まで取り決められた。父の喜びに引きかへて娘は死ぬばかりに悲しかった。祝儀の日が次第に逼ると濱中は何となく騒がしくなつた、望みを失くした若者たちの氣持ちは次第に不穩の動きを見せるやうになつた。

今日は愈々祝言の日であつた。父の善平を初め、家一同が喜びに輝いて居る間を、娘はそつと一人家を抜け出して、かねて思ひ慕つた若い漁師の家へ駆け込んだ、そして驚く若者に泣いて心の裡を訴へた。若者は此の不意の出来ごとを取る術<sup>すべ</sup>としてはなかつた、二人は手を執り合つたまゝに運命の指圖を待つより他はなかつたのである。

二人は間もなく見付けられた。泣きぬれた可愛い娘を前にしては怒るにも怒れない父親であつた。善平はすべての罪を我が身一つに背負ふて二人はやがて晴れての夫婦になつた。村の若者たちも親分の善平には手を出すわけには行かなんだ。

それからして暫くの後、善平夫婦は病氣で續いて亡くなつた。若い二人を憎む村の者たちは、

戀の意趣返へしにとう／＼二人を村から追ひ出してしまつた。二人は流浪の旅に出た。男は

一と張りの網を肩にして身重き妻をいたはりつゝ、僅かな獲物にその日／＼の細い煙を立てながら、信濃路へ迷ひ入り、此の峠にさしかゝつて妻はお産の紐を解いた。そして長い旅路に惱む親子三人は遂に此の峠の頂で、故郷琵琶湖の方を眺めつゝ抱き合つたまゝで死んだと云ふ。程經て村の人たちが見付け、親切に三人を一つ所に葬つてその墓標に一本の杉の木を植えた。すると不思議に其の木が一夜の中に伸びて雲を凌ぐ大木となり、而かも其の梢が三つに分れてその一つ／＼が蛇の頭と變じ、遠く近江の方を睨んで居るのであつた。

其の頃琵琶湖に大暴れがして船は摧かれ、人が死んだ。嵐の靜まつた湖水の水底に蛇の頭が三つ、絡み合つて漂ひまはるのを漁師たちは眼の當りに見た。占つて貰ふと何年、何月、村を追はれた夫婦の者が信濃の山奥で亡くなつた、濱の凶事はその崇りのためだと云ふ。漁師たちは直ちに此の峠を尋ねて三人の亡靈を神に祀り、三社大権現の社を建て、其の跡を懇ろに



吊つた。そのために杉の木の怪異も、湖水の不思議も漸くに鎮まつた。  
 峠の頂きに男の持つて居た網が掛けてあつたので、其處を網掛峠と稱し、その杉の大木を蛇  
 瘤杉と稱ぶようになった。

### 月瀬の大杉

根羽村字月瀬の日影平にある大杉は、周圍が目通りで四丈と云ふから、太さに於ては決して  
 他に引けを取らない大杉である。古來靈の木と稱せられ、人々の尊崇して居ることは大へん  
 なものであつた。何事か異變の村にある時は此の木の枝が風なきに必ず折れると稱し、今ま  
 でにしばしば其の奇瑞を示したので一層の信仰を集めて居る。齟齬むしはを病む者此の木に祈れば  
 効驗立ち所に現はれると信ぜられて祈願をこめる者が多い。

明治四十一年神社統一の際、月瀬神社は村社に合併となり、境内の立ち木は全部伐採せられ  
 る事になつた、そして此の御神木も時價千圓で賣却せられる運命にまでなつた。而し月瀬の  
 人たちの此の御神木に對する崇敬の念は深かつた、祖先以來信仰の目當になつて居た杉の木  
 の賣られて行く事を悲しみ、區民の總寄合で八百圓を齎出する事になり、村より買ひ戻して  
 永久に保存せられる事になつたと云ふのは忘れてはならぬ美談である。

### 小園の古櫻

異變を知らせる靈の木は神稻村にもあつた。同村字小園おきのの姫宮神社境内の古櫻、樹齡數百年  
 を數へる老木であるが、此の木に何事か異變のあるのは凶兆であると古來一般に信ぜられて  
 居た。數年前のある夜の事、此の木の枝の一本左に伸びたのが、風なきに折れたのを朝にな



つて發見した。村人は占ひによりて火難を恐れ、一方警戒を固くすると同時に臨時の祭典を行ふて神靈を鎮め奉つたと云ふ事である。

### 鷹待ちの大藤

西箕輪村字吹上は今以つて古稱のまゝに鷹待たかまち(タカマツ)と稱んで居るが、此處に祀られる若宮神社の御神木の大花柏さむらひに纏綿として巻き上る藤の巨木がある。春の花時に雲のやうに咲き誇る紫の色は、嘗に村人の觀賞のためのみでない、此の花を水に浮かべて飲めば諸病に効験が著しく、特に老衰を防ぐと信ぜられ、又此の花を持つて居れば幸福が授かると稱して拾ひに来る者がある。

花が木の頂上まで咲くのは豊年の兆、中途で止まるのは不作の知らせ『お宮の藤が上まで咲

いたから今年は陽氣が良からう』とか『今年は中途で止まつたから陽氣が心配だ』とか云ふ豫言は不思議にもよく當るそうである。

### 靈松一本松

南箕輪村字南殿みなみとのの畑の中に素晴らしい老松が一本、傘を擴げて聳えて居るのを俗に一本松と稱んで崇め祀つて居る。もう何百年と云ふ樹齡であろう。

土地の人の話で聞くと、今からざつと百四五十年も昔の事、持ち主が此の樹を切ろうとしてある日斧で幹を切りかけた所、その疵口から血がたら／＼と流れ出した。びつくりして早速切ることは止めたが、その祟りであろう、いろ／＼の災害異變が引きつゞいて村中に起るので、村の人たちはこれは必ず彼の靈松の祟りだと恐れかきこみ、傍に祠を建て、木の靈を鎮



め祀ることにした。今日に至るまで毎年忘れずに祀りつゞけて居ると云ふ。

此の木の幹にはその中途に俗に天狗の腰掛と稱ぶ大きな瘤が一つ着いて居る。一本松様のお使ひをする天狗が、此處に腰を掛けて四方を見廻して居ると云ふのである。

### 圓座松

これに似た靈の木は、同じく上伊那郡の美和村字<sup>ひぢ</sup>非持にもある。俗に圓座松と稱ぶ異形の松の一と叢が、此所に尊き神域を作り、昔から天狗の住む所と稱して猥りに人の入ることを禁じてある。年に一度天狗が此處へ來て休むと信ぜられ、祠を建て、神に祀る。木を損ふことは勿論、此の靈域に近付く事さへ固く誠められて居る。明治の初年此所に山火事があつた際にも、此の一と叢だけは不思議にも火難を免れたと云ふために益々人たちの尊信を高めて

居る。

### 天狗の森

古來天狗が住むと稱せられた木や森は此所にもあつた。神原村地藏峠の中程に眞つ黒く茂つた杉の森、此れは天狗の住み家であつた。森の中には何様かゞ祀られて、劍を二本付けた奉納額が澤山に上げられて居る。

### 血の流れた一本杉

切つたら疵口から血が流れ出したと云ふ樹の話はまだ他にもあつた。



上飯田町の字土井に昔大きな杉の木があつた。土地の人は此れを一本杉と稱び、木の下に神様を祀つて崇めて居た。然る所此の御神木の枝が矢鱈に四方に擴がつて行くために田畠の邪魔になつて百姓たちは困らだした。寄り集つて相談した結果、枝くらいなら切つても御咎めはあるまいと、愈々御神木の枝を下ろす事になつた。ある日朝から大勢の者が集まり、その枝を切りにかゝると、驚いたことには其の切り口から血が流れ出した。百姓たちはそれを見て膽を潰し、恐れてそれぎり寄りつかず、木はそのまま神様に祀られて相變らず榮えて居た。而しそれも昔の話で、その木も何時の代かに切られてなくなつた。

此の一本杉には次ぎのやうな話も傳へられて居る。昔波合で討死なされた尹良親王（よきよし）の御首（しるし）を賊共が此處まで持ち來り、此の根元へ埋めまいらせたと云ふのである。

いろくの樹

赤兒の泣く二本松

會地村（あいち）の駒場から阿智川に沿ふて晝神へ上り行く路傍の大きな二本松、雌松と雄松が仲よく身を寄せて茂り合つて居る下に、いろ／＼な石神様が何本も祀られて居る。昔源義經が奥州へ下る時に手植えた松だと云ふ。月の暗い晩など、その下を通ると赤兒の泣き聲が聞えて來たそうである。して見れば此所も矢張り此の世の賽の河原であつたのかも知れぬ。夜泣きする兒に此の木の枝を探つて來て火を點して見せると、その癖が不思議に止むと云はれて居る。



此れと同じやうな夜泣き松は山本村の沖平にもある。夜泣きする兒に此の松の枝に火を點して見せると、子供の夜泣きが止むそうである。

### 呼ばり松

秦阜村<sup>アヤノ</sup>字打澤<sup>うちさわ</sup>の呼ばり松、一寸小高い丘の上にある風雅な松ではあるが、昔此のあたりは狸の根城であつた。打澤<sup>うちさわ</sup>、稻伏戸<sup>いなふしど</sup>、そこらあたりの若い衆で、此の呼ばり松の狸に誘はれて行く衛知れずになつたと云ふ者さへもあつた。夜遊び歸りの若い衆が、おそく此所を通ると美しい女が出て来て誘ふ、なみ大ていの若い男は、此の狸にそうと知りつゝも見事に騙されてしまふそうである。分かれの時に、明日はあの松の木の下で呼ぶからきつと出て来て呉れ、と云ふ。そしてその明けの晩には約束通り其の松の木の下で女が呼ばる。呼ばれた男は、ど

うと云ふ事もないのに無暗に行きたくなつて其の松の木の所へ行く、そして其のまゝ行く衛知れずになつた男衆が、今迄にもう二人も三人もあつたそうである。

### 立石の雌杉雄杉

三穗村の立石<sup>たていし</sup>には昔から有名な杉の大木が二本ある。同村立石寺<sup>りつしやくじ</sup>の舊い記録にも『何時の頃よりか大杉二本あり、人皆雌雄の杉と云ふ、雄杉は氏神の社頭にあり、雌杉は阿彌陀堂にあり、依て杉の堂と名づく』とある。此の氏神と云ふのは木船神社の事である。

大きな雌杉と雄杉、二本の樹の間は數丁を隔て、居るけれども、朝日には雌杉の影が雄杉に届き、夕日には雄杉の影が雌杉に達す、日に一度は二つの樹の影が必ず一つに結ぶと云はれて居る。



## 清明櫻

三八

市田村字出原いづはらにある齡千年の清明櫻、俗に阿部清明が植えた木と稱して此の名がある。此の附近の農家では、此の櫻の樹の花の開き加減によりて糶播きの期節を定めるので、一名苗代櫻とも稱びならはして居る。

## 有作桃

昔煙草の産地で知られた清内路村も、煙草が官營になつてからは火の消えたやうな淋しい村になつた。秋の未から春へかけて、山に雪のある間は爐邊へ家内中が寄り集まり、時代に遠

い浮き世話しなどをして暮らし、春になつて桑の木が芽を吹く頃になると、働き手は皆引き連れて山の家へ蠶を飼ひに上り、村には留守居の者だけが残る。その清内路村には昔は桃の木が多く、今でも村中到處に見受けられるが、それはもとの名を有作桃ゆうさくと云つたものである。むかし此の村の有作と云ふうす馬鹿の百姓が、ある日仕事に出たまゝ歸らなかつた。村中何所を捜しても見付からぬのは、きつと天狗様に連れられて行つたに違ひないと云ふ事になつた。天狗は其の頃よく人をさらつて行つた。こうして村の人たちが騒いで居る時に、有作は本當に天狗に連れられて諸國見物をして歩いて居たのであつた。それから數日たつて有作はひよつこり裏の山から歸つて來た。村の衆は珍らしがつて有作を取り巻いているく面白話を聞かせて貰つた。有作が片手を矢鱈に固く握つて居るのを、皆がだまして開かせて見ると桃の實を一つ持つて居た、赤い顔の人が貰れたと云ふ。その實を植えて置いて生へたのが今の有作桃で、天狗様の授かり物であつたのである。



## 地團太の松

上久堅村字知久の神峰城は、代々知久氏の居城で天然の要害であつた。武田勢が伊那に侵入した時、知久大和守頼元が城を守つて力戦した。流石の甲斐の軍勢も天険に支へられて容易にこれを抜くことが出来ず、最後に謀將山本勘助の策を用いて城の水路を断ち切つた。甲軍は今にも城が陥るかと待つて居たが、更にそんな様子が見えぬ。勘助ある日物見の松に上つて遙かに城を見渡すと、城兵は敵を欺くために城の突端の礮岩の上から白米を水の如くに流し下した。遠くこれを眺めた勘助はこれを水と見違へ、この分ではとうてい落城は覺束ないと思つて口惜しがり、松の木の上で地團太を踏んだと云ふ。踏まれた松はそれ以來枝は四方に伸びても丈けが少しも伸びぬ。

地團太松のある所は下久堅村から長い坂を一つ上つて上久堅の柏原に出る村境、勘助の昔話は兎も角として、そんな木の一本位はあつてもよさそうな所である。

## 美女が森の御影杉

赤穂村字赤須に郷社の大御食神社があつて、その社の杜を美女が森と云ふ、その神社の境内に周り二丈餘程の大木があつて、これを御影杉と稱ぶ。もう何回も植え継ぎして來たものと云はれて居る。

日本武尊東征の歸途に此の地を御通行になり、此の杉の木の下でお休みになつた、その時此の赤須の里の赤須彦が此の木の下に假宮を作り、其處で尊を饗應し奉つた。尊大に喜び給ひ赤須彦に御食津彦の名を賜ふた。尊は此の杉を大に愛で給ひ『此ノ杉ハ、彌ヤ榮ヘテ、丈高



シ、奇シ杉也、綾杉也哉』とお語りになつたと傳へて居る。此の時尊が手をお掛けになつた側の石を御手掛石と名づけて居る。

## 怪火の話

### お玉の火

昔生田村にお玉といふみなし兒の娘があつた。身寄りと云つては一人もないので、村の庄屋に引き取られて毎日いそ／＼と働いて居つた。お玉は可愛い娘であつた、赤い襦袢をかけて、裏の小川で洗ひ物などして居るのを、通りがりの人達が振り返つて見て行く程に好い娘であつた。

ある日、庄屋の家に多勢の來客があつて、其の跡片付けをして居る時、お玉はそ／＼で大切な皿を一枚落して割つた。其の家の主婦と云ふのが良くない人で、今微塵に割れた皿の前へ兩手を突いて、只管に詫び入るお玉の頬を有り合ふ棒でしたゝかに打つた。可哀そうなお玉はとう／＼追ひ出されて、痛ましい傷を押さへては／＼と其の家を出て行つた。誰にた頼ると云ふ當てもないお玉は、亡き母親の形見の品々を袂に包んで、泣く／＼何處へ行くつもりであつたであらう。

天龍川を大島村へ渡る宮ヶ瀬橋のあたりは、水が渦を巻いて大きな淵になつて居る。お玉は赤い花緒の下駄をとぼ／＼と曳きながら、何時か知らぬ間に此の淵の岸に立つて居た。

た頼る所もない辛い此の世に生きるより、死んだ父母の側へ行つて、一つ蓮の上に乗る方が今のお玉にとつてはどんなに仕合はせと思はれたであらう。お玉は觀念の眼を閉ぢて合掌した。



赤い緒の下駄が波の上をふわ／＼と流れて行つた。其の事はすぐに村へ知れた。村の人達はお玉を可愛そうに思つて、話はそれからそれへと傳はつて行つた。

しばらくすると怪しい噂が立つた。小雨が糸のやうに音も立てずに降る闇の夜に、毬のやうな青い火の玉が、山手の方からふわ／＼と浮んで来る、それが天龍の川筋まで出ると二つに割れて、その一つは矢張りふら／＼と河傳ひに下の方へ漂つて行く、他の一つは橋のあたりまで来てぼつかりと消える。村の人達はそれをお玉の火と稱んで、可哀そうなお玉の事を今でも憐れんで居る。

### おかやの亡魂

山本村字久米の水晶山には、毎年夏になると火の玉が現はれる、土地の人達はこれをおかや

の亡魂と稱んで居る。此の久米山のおかやに就ては古來いろ／＼の話が傳へられて居た。今其の一つ二つを擧げて見る。

○

昔京都の或るお公家様の屋敷へお出入りの庭造りがあつて、それが何時の暇にかそのお屋敷のお姫様に馴れ初めた。斯うなつて見ると、人目の多い都では心の儘にならないので、二人は手に手を執つてこつそり屋敷を抜け出した。何處へ行くと云ふ當てもない二人は、長い旅をしつゞけた果てに、つい流れ／＼て此の山本へ来て落ち着いた。男は毎日山へ行き、薪を採つて来て、その日／＼の暮しを立て、居たけれど、そのうちに駒場の宿場女に馴染みが出来て、足繁く通ふようになった。男の不身持ちに氣の着いた女は嫉妬の焰に身を焼いて、家に争ひの絶え間がなくなつた。男は或る夜、女を欺いて山へ誘ひ行き、人知れず亡き者にして、駒場の女を連れて何處へか逃げて行つた。それは夏の夜の出来事であつた。殺された女の恨



みはその時から其の山に残つたと見えて、それからして後、毎年夏のその頃になると、青い火の玉が、その山の上にはつきり現はれて、それが、男が女を連れて逃げて行つた後を追ひかけるやうにして、ふわ／＼と飛んで行く。殺された女は、名をおかやと云つたので、その火の玉をおかやの亡魂と稱んで居るのである。

○

又一説に次ぎのやうな話も傳はつて居る。

昔、久米の里に一人の樵夫があつた。毎日山へ登つて薪を伐るのを仕事として居たのに、或る日、常のやうに山へ行つたまゝ、日が暮れても歸つて來なかつた。樵夫には一人の妹があつた。妹は兄の戻りの遅いのを氣遣つて、暗い闇の夜を兄を尋ねて山へ分け登つた、そして聲を限りに呼ばつても、叫んでも、捜す兄の姿も見えねば、聲も聞えなんだ。妹は暗い山の中を夜通し兄を尋ねまわつて精根が盡き果てたのか、ついそれなりに山の中で哀れな最後を

遂げた。それから後、毎年夏の夕暮時になると、山の懷に怪しい火の玉が浮んで、それが力なくふわ／＼と動いて山の上の方へ登つて行くのが見えるようになった。妹の名をおかやと云つたので、おかやの亡魂と稱んで不思議なものに思つて居る。

○

又斯う云ふ話も残つて居る。昔此の山に城があつた。戦ひ敗れて落城する時、おかやと稱ぶお姫様が井戸へ身を投げて死んだと云ふ。今でも夏の夕方になると、青い火の玉が山の古井戸から抜け出して、城跡をひとめぐりしてやがて又井戸の中へ入つて行く。昔此處で死んだお姫様の魂だと云ふのである。



## 入道ナギの火玉

四八

七久保村と片桐村の境、日向山の入道ナギから昔は金右工門の入道と火の玉が出た。金右工門は領主片桐小八郎の家來であつた。織田軍亂入の節、戦争に敗れた小八郎は山の方へ逃げて行つた。家來の金右工門も無論主人の後に従ふ筈だつたのに、自分の家が戀しくなり、一人こつそり逃げ歸つて家に隠れて居た。戦争はどうやら濟んだけれど、金右工門の一家は山賊に襲はれて財産ぐるみ妻子までも奪ひ去られてしまつた。金右工門は其の爲めに氣が狂ひやがてふと姿が見えなくなつた。まもなく入道ナギから金右工門の入道と、火の玉とが出るようになった。そしてそれを見た者は皆氣違ひになつて死んでしまつた。村の人達は大いに怖れ神主に頼んで金右工門取り鎮めの宣詞を上げて貰ふと、其の夜入道ナギが俄かに明くな

り、火の玉が幾つとなく現はれたと見ると、やがて大入道の姿が見えた。そしてその入道は村の人々があれよ／＼と見て居る前を、主人小八郎が逃げて行つた小八郎ヶ岳の方へ飛んで行つた。入道と火の玉とはそれ切り出なくなつた。

## 夫婦火

東箕輪村の三日町と長岡とは、天龍川の東に並んで居るが、此の兩方の村から、昔は毎夜火の玉が抜け出して來て會ひに來る。途中で二つが出會ふと、そこでばつたりと消えて見えなくなるのであつた。昔此の村の若い男と女とが戀に死んで、魂は一つに結ばれたが、死骸は別々に分かれて葬られた。二人は死んでもまた會ひたがつて、こうして火の玉になつて毎夜出會ふのであつた。

四九



## 犬房丸のともし火

西春近村の小出には、昔工藤祐經の一子犬房丸いぬぼうまるが流されて来て、一命を終つた遺跡がある。今は其處に社があつて犬房丸の靈を祀つてあるが、昔はその社に毎夜のやうに火の玉が浮び出た。而かもそれが、遠方からは見えるが、近く寄つては見えないそうであつた。犬房丸の恨みが、毎夜火の玉になつて出たのだと云はれて居る。

## 狸和尚の話

狸が鎌倉建長寺の住職に化けて、諸國を勸化して歩いたと云ふ話には、相州武州甲州其の他、かなり廣い區域にわたつて傳はつて居る。

初め建長寺の和尚、山門建立の寄進を思ひ立ち、行く先々／＼の場所日程に従者に示して、愈々藤澤へ向つて出發した。然るに藤澤の宿にて和尚大病にかゝり、其の翌日駕籠で建長寺へ引き返へした。すると山内に永年住んで居た狸、此の由を聞き、己れ一番和尚に成り替つて此の仕事を仕遂げてやらうと、その夜老い先き短い和尚を喰ひ殺ろしてしまつた。其の翌日けろりと病氣の全快した和尚、實は山内の古狸が、お供を伴れて勸化に出かけた、



と云ふのが此の話の發端になつて居るのだが、而し中には建長寺と云はず、京都紫野の大徳寺を名乗つて來た者もあつた由であるし、其の他にも諸國方々、これに似寄りの話しは幾つも残つて居る。いづれそれ等と同じ穴の狸に相違ないのが一人、此の伊那を御通りになつて居るのだから面白。

### 狸の繪像

下伊那の泰阜村字温田に、不思議な繪像がある、人間の顔へ獸の胴體を着けたやうな格好で何とも合點の行かぬ代物であるが、それが狸の描いた繪だと云ふのであるから大したものである。

久しい昔の話、遠州路の方から峠を越して、不思議なお駕籠が一挺、お伴を連れて此の村へ

は入つて來た。一体何處から來て何處へ行くのやら、お駕籠の中には誰方が乗つて御座るのやら、附き添ひの御家來衆に尋ねても、たゞ由緒ある都のお公卿様だと云ふだけで、其の他に就ては何にも話して呉れなんだ。お駕籠の垂れは始終びたりと締め切つたまゝで、まことに以つて判断に行かぬ。兎に角そう云ふお駕籠が一挺村の庄屋の所へ入つて來た。

温田の庄屋の家では、第一に京都のお公家様と云ふ振れ込みに恐れ入り、此の不思議な珍客様を歡待すの上に上を下への大騒ぎであつた。お駕籠のまゝで座敷の真中へ擔ぎ込み、用事の時此方から呼ぶ故、それまでは誰も決して參るな、と云ふ嚴重なお達しだ。家内一同は、たゞ／＼高貴の御方とばかり崇め貴び、遙か末座に低頭平身して家門の譽れと恐悅至極であつた。

駕籠の中から何が出て來たか、御風呂へ入る御公家様に尻つぽが有つたか無かつたか、家の者達は何にも知らず、たゞ家に餘る光榮を畏れかしこみ、村中に布令を出して路傍の草を刈



らせ、道路の掃除をさせて、明日のお立ちに粗そうのないやう、只管に心を配つて居た。其の夜も無事に明けて次ぎの朝、お駕籠はやつぱり扉を固く締めたまゝ座敷の中からすつと、家内一同が頭を下げて居る上へ、昨夜の御禮だと云つて不思議な繪像を一枚。温田で狩り集めた百姓達のにわか作りの行列が、柿野まで續いて行く道中に、村の者共は地面にかしこまつて伏し拜んだ。柿野でも同じやうな繪を一枚、お駕籠の扉は始終締め切つたまゝ、不思議を人々の心に残して北の方を指して立ち去つた。

食事の時も、風呂へ入る時も、一さい人を近寄せなかつたその隙をうかゞつて、不届者が一人、襖の陰からそつと覗いて見た所、御馳走を御膳の上へぶち明けて長い舌で舐めて居た、湯に入る時には長い尻つぼが湯氣の間から朦ろに見えて居たとの話。そして北へ北へと行くうちに、上穂の光前寺の飼犬に正體を看破られて噛み殺された。却を経た古狸であつたと云ふ。今に傳はつて居る不思議の繪像は、その時描いて残して行つたものである。

## 建長寺様

徳川中葉の話、鎌倉建長寺の和尚様が此の伊那をお通りになると云ふので、そこから界限は大評判であつた。和尚様は始終お駕籠に乗り、『わしは犬が大嫌ひぢや』と云つて、通り路に居る犬共は和尚様御通行の時には固く繋いで居く様に、と云ふ御布令が出た。和尚様は飯田から伊那を通つて、松本の方へおいでになるのだ、と云ふ。頼まれれば説教もし、又繪などもかいた。或る時、宿屋の主人、障子の穴から覗いて見ると、和尚様が食事を皿の上へ明けて食べて居る様子がどうも怪しいと氣が着いた。

建長寺様はともかくにも無事に伊那路を過ぎて塩尻の本陣に泊り、その翌日は愈々桔梗ヶ原と云ふ事になつた。然る所、此處に一匹の強犬があつて、それが建長寺様のお駕籠の方へ



近付いて行つたので、中の和尚様は大いに驚き、戸を明けて外へ飛び出した處を、その犬が躍りかゝつて喰ひ殺した、正體を見れば年を経た大きな古狸であつた。

序ながら書き添へて置くが、松本の在には此のほかにもまだ一人の狸和尚が居た。中山村の字埴原と云ふ所で、其處には其和尚の書いたと云ふ書が今でも残つて居るそうである。和尚はそれから長野の善光寺の方へ行く途中、更科あたりの或る村へ泊り、夜分柿の木へ登り、柿の實を探つて食べたので正體が露見して殺されて終つた。そゝうな話ではあるが、狸和尚の最後らしくて一寸面白い。

## 河童カワコの話

### 家傳通風藥

上伊那郡高遠の内藤様は三萬三千石、その領分内の川を預かる川奉行の中村新六殿は、中澤村の大久保に宏大な屋敷を構へて居た。近い所を天龍川が流れて、其の深い淵の中には河童カワコ（カワランベ）が住まひ、時々通行人を水の中へ引つ張り込んで、しんの子を抜くと云ふ評判であつた。此の河童は、全身が眞つ青で、長い頭髪を生やかして居たと云ふ話である。

或る日、川奉行新六殿の馬が、その淵の畔を通りかゝつた所、水の中から河童が手を出し



て馬の尻尾しっぽを握み、力一ぱいに水の中へ引き込まうとした。河童は水の中に居る時は非常に力が出るものだそうである。馬はびつくりして、此れも一生懸命に引つ込まれまいと足を踏ん張り、此處に河童と馬との力競べが始まつた。稍々暫らくもみ合つた未、河童の方が負けて、河から外へ引き上げられてしまつた。急いで手を離そうとしても、馬の尻尾を餘り固く手にぐる／＼と巻き付けて居た爲に、早速離す事も出来ず藻掻いて居る間に、馬はどん／＼と駈け出す、河童はそのまゝする／＼と曳きずられてとう／＼新六殿の家敷の厩の中まで連れ込まれた。其處で河童も漸く手を離し、水はないかと捜して見ると、丁度馬槽の中に水が一ぱいあつたので、早速その中へは入つて隠れて居た。やがて下男が馬に株を飼はうと厩へ來て見ると、馬槽の中に河童が居る。不届な奴と直ぐ捉まへられて、主人新六殿の前へ引き出された。河童は両手を合はせて拜みながら『命だけはお助け下さい、そうしたら其のお禮に妙薬の拵らへ方を御傳授致しませう』と頼むので、新六殿も、殺して見た所が無益の殺生

だからと助けてやつた。河童大いに喜び、新六殿に妙薬の製法を教へてやり自分は再び河の中へ歸つて行つた。それからして其の薬は家傳の妙薬として子々孫々まで傳はり、『家傳通風薬』と云ふ名前でも今でも盛に賣れて居る。至極よく利く薬だそうであるが、而し河童に傳授せられた部屋で拵らへたのでないと、利き目がないと云ふ話である。

### 河童の綱曳き

これと同じやうな話が伊那富村にもある。昔此處の百姓が、ある日飼ひ馬を天龍川の川端へ放して置いた處、河の中から河童が手を出し、馬の手綱を握んで水の中へ引き込まうとした而しなか／＼馬が動かないので、河童は考へて今度は手綱を自分の胴へぐる／＼と巻き付け力一ぱいに引つ張る。馬も水の中へ引かれては大變と、此れも一生懸命に踏み泳らへて、此



處に河童と馬との綱曳きが始まつた、そのうちに馬の力が勝つて河童は水から外へ引き出されてしまつた。馬はそのまゝ家の方へ向つて走り出す、河童は胴へ巻き付けた手綱を解く事も出来ず、引きずられたまゝとうとう百姓家の表まで来て、其處で生捕りとなつた。河童は涙を流して、命ばかりは助けて下さいと頼むので、百姓も憐れに思い、綱を解いて河の中へ放してやつた。それからして毎日、朝になるとその百姓家の前に澤山の川魚が並べてあつた。これは河童が危い命を助けて貰つたお禮のために持つて来たものであつた。

## 神様に關する話

### おさわ様の由來

女の怨みは恐ろしいものだ。昔、喬木村で一番とまで云はれて居つた物持ちの何がしの家の潰れたのは、女中のおさわが祟つた爲めだと云ふ。おさわの魂が其の家の屋な棟に残つて居て、その家には代々氣違ひが生れるそうである。

おさわの主人は此の上なしの人非人であつた。少しばかりの落ち度がおさわにあつたのを取り上げて、散々に打擲した揚げ句、怒り狂つた主人はおさわを木の箱の中へ押し籠め、蓋の小さい孔から蛇を幾筋も入れて、それを天龍川へ流してやつた。おさわの母親は、わが子の變事を聞いて、狂氣のやうに娘の跡を追つた。そして松尾村の辨天橋の近くの所に、母を待つかと思はれて、水の上に漂つて居る箱の中の娘に漸く追ひ付く事が出来た。流れを隔てた母と娘には、これが永久の分れであつた。此の怨みは何時か思ふ存分にはらしてやれ、悪魔の家を黒土にしてしまへ、と、母親は全く氣が狂つて娘に斯う叫んだと云ふ事であつた。呪つた者は又呪はれる。村一番と自慢して居たその家は、それからして凶事ばかりが續いた。家



は間もなく潰れてその跡にはペン／＼草が青々と茂り、その上に代々氣違ひばかりが生れる事になつた。それでおさわの崇りを恐れ、おさわ様を神棚へ祀つて亡き魂を慰めて居るとの事である。

## 足神様

秦阜村<sup>アサヒ</sup>字田本の路傍に足神様と云ふのが祀られて居る。昔遠山家の殿様がひどく百姓を虐めたので、百姓はたまりかね、一揆を起して不意に領主の館に亂入した。歴史が傳へる遠山家の没落はまことに悲惨を極めたものであつた。一族悉く四方へ逃げ延びるそのうちに、奥方も馴れぬ足に茨を分けて何處へと云ふ當てもなく落ちて行つたが、温田<sup>ぬかた</sup>の坂道へ來た時に、懷中から鏡を取り出して變り果てたわが姿を見て泣いたと云ふ。一揆に追はれて又も其處を

逃げて行く時、鏡を路傍の草むらに投げ捨てると、その鏡から涙が流れて泉となつて、今でもその時の涙の水がじめ／＼と草の根をくゞつて流れて居るそうである。

奥方はそれから秦阜村の田本まで辿り着いたが、足の痛みに堪へ切れず其處へ倒れてしまつたのを、里の人達が懇ろに介抱してやつた。奥方は大へんに喜び、立ち去る時『此の後若しも足を病む人があつたなら、今日のお禮にきつと治して進ませう』と云つたので、里人達は其處へ祠を建て、足神様と崇め祀る事になつた。足一さいの諸病には大へんに効驗があると云つて參詣する人が澤山にある。

## 尹良親王を祀る家

妙法院宗良親王の御子尹良親王<sup>ゆきよし</sup>が、信濃より三河へお越しの途中、波合村に於て土賊駒場小



次郎飯田太郎等に取り囲まれ、敢なく生害遊ばされたと云ふ事は、波合記の記す所であつた。其の時の事と思はれるが、尹良様が松尾村を御通りの節、相憎お召しの草鞋の緒が切れた。従者が附近の農家へ立ち寄つて、代りの草鞋を一足貰はうとした所、その家の者は意地悪く拒んで呉れぬ。致し方なく尹良様は裸足のまゝでお出かけになつた。そして波合で賊徒に圍まれて墓ない御最後を遂げさせられた。その時の罰が當つてか、その百姓家の者は代々足を患ふので、昔の罪を後悔し、小さな祠を建て、尹良親王の御霊を祀つて居る。

尹良様を氏神として祀つて居るのは此處ばかりではなく、川路、伊豆木その他諸所に祀られて居るのが見受けられる。

尹良様の話の序だから記して置く。波合村の猫には蚤が居ないと云ふ。これは昔尹良様が此處を御通行の時、病氣のために十日程を御所平の老婆のあばら家にお過ごしになつた。その時その家の猫が蚤に攻められて困つて居るのを御覽じて、老婆の親切に酬ゆるお禮心で、手

づから猫の蚤を取つておやりになつた。親王様のお恵みが後に残つたと見えて、波合の猫にはそれから蚤が居なくなつたと云はれて居る。

### 清内路のお竹様

昔飯田の町で悪事を働き、お尋ね者になつたお竹坊が、飯田を逃げて清内路の山の中へ隠れたのがとう／＼見付かつた。手を合はせてお慈悲に命だけはとあやまるのを、容赦なく藤蔓捲きにして打ち殺した。殺されたお竹坊の恨みが飯田に祟り、間もなく飯田が大火事になつた。

飯田焼けたはお竹の罰よ

お竹祀らにやまた焼ける



誰の口からともなく、こんな唄が流行り出して、お竹の罰が怖ろしくなつた。そこでお竹坊を殺した所へ祠を建て、お竹様を祀る事になつた。その後、お竹様のお許しをうけて其の祠を村の鎮守の杜へ遷座した。そしてそのもとの祠の裏手に栗の大木があつたのを、商人が買ひ取つた、代金を支拂ひ、伐る日まで取り決めて家へ歸つて見ると、その商人の家が丸焼けになつて居た。それもお竹様の罰だと云ふ事になつて、その後はその樹へ手を付ける者もなくなつた。

### 頭権現様の由來

智里村字小野川の小高い丘の上に祀られる大平靈社は俗に頭権現様かうべこんげんと稱び、頭の諸病一さいに大へん御利益ごりやくがあると云ふのでよく流行る。

昔一人の山伏が、日暮れに殿島の部落を通りかゝり、其處に草刈りをして居た百姓の辨治に道を尋ねたので、辨治は道を教へてやつた。その時何かの言葉の間違ひから二人は喧嘩を始め、辨治は手にした草刈鎌でとうとう山伏を斬り殺し、死骸を路傍の草むらの中へ埋めて置いた。それからしばらくの間は何事もなかつたが、ある年、其の村に疫病が流行して澤山に人が死んだ。其の時一人の病人が熱に浮かされて床の上に起き上り、山の方を指差して云ふ事に『俺は昔彼處で百姓に殺された山伏だ、其の時草むらの中へ埋められたまゝで、眼口の間に樹の根がからみ着いて魂の浮ぶ時がない、速かに掘り返へして祀つて呉れたら此の疫病はすぐに治してやらう』と云ふ。人々は不思議な事に思ひながら、云はれるまゝに其處へ行つて草むらを掘り返へすと、果して髑髏が一つ、樹の根が固くからみ着いて、見るからに痛ましく埋まつて居た。よつて直ぐさま其れを取り出し、今の場所に社を建て、神様に祀つた爲め疫病は忽ちやんだ。頭の病氣には靈驗があると云はれて、今でも大へんに流行つて居



## 修驗者に祀られた佐倉様

上伊那の者で、昔佐倉宗吾に大へん恩願を受けた修驗者があつた。その者が宗吾の御靈を背負つて、遙々と風越山の下、松川に沿つた小山の上へ來り、其處へ佐倉明神の社を建て、朝夕禮拜して居つた。その後、その修驗者が死ぬ時に『若し我が亡き跡を祀つて呉れる人があつたらば、どんな難儀でも救つてあげよう』と遺言をした。お社はその後村の人達によりて懇ろに祀られて居た。いろ／＼の事に御利益ごりやくがあらたかなので參詣人の絶え間がない。又その神様のお使は白蛇で、時には姿を見せる事があるとも云ひ傳へられて居る。

## 白狐を祀る愛宕の稻荷

飯田町の南端、松川に臨む愛宕の高台に稻荷社が祀つてある。此の地はもと長姫城の舊址で飯坂と稱し、坂西様が住まつて居た所である。初め坂西様が此處へ來てお城を築く頃、此のあたりは一面の黒木立ちで、晝間でさへも日影を洩さぬ程の茂みであつた。主従の者は東も西も分らぬ林の中に踏み迷つて思案に暮れて居ると、何處からともなくその前へ白狐が一匹現はれて、わしについて來いと云はぬばかりに、尾を振りながら先きに立つて行く。主従の者は誘はれたやうな心持ちになり、狐の後を尾おいて行つた。夜になると白狐の點す狐火が道を照して晝間のやうに明るかつたと云ふ。

やがてその白狐が今の愛宕の出鼻まで來た時に、ふと何處かへ姿を消して居なくなつた。主従の者が四方を見廻はすと、其處は川を前に控へた斷崖の上で、城を築くには此の上もない



要害の地であつたので、坂西様は白狐のお告げに相違ないと喜び、早速其處へ城を築く事にした。飯坂の城と云ふのが即ち此れであつた。後に城主の由政がその時の白狐をお祀りしたのが今の愛宕の稻荷様である。

### 跛山の神の片足草鞋

竜丘村字琴ヶ原の花御所の跡に跛山の神が祀つてある。祭神は後醍醐天皇の御妹で、諡して淨元大姉と申し奉る。

昔後醍醐天皇の皇妹、都の亂を避けて當國へお下りになり、松尾城主の小笠原貞宗をお頼りになつた。よつて貞宗は此處へ御所を營み、その裡に閑居をさせ申して置いたと云ふ。初め此の地へ參られた時、御足を痛めて大へんに難儀をなさつたとの事で、御臨終の時の遺言

に、此の後、足を病む人々の病氣を治してやらうと仰しやつたとの話。それで其の御所の跡に跛山の神を祀る事になつた。足を病む人が此所へ願をかけると必ず全快すると云ふ。そしてそのお禮には草鞋を片足づゝ奉納する事になつて居る。

### 南京茶碗の若宮八王子

神原村坂部の諏訪大明神の境内に、靈社若宮八王子が祀られて居る。傳ふる所によると、永享三年の八月、藏原豊若丸と云ふ美しい稚子が、奇麗な南京茶碗を一つ抱へて此の土地へ迷つて來た。坂部や向方の百姓達は、こんな美しい稚子ならば、お金も澤山持つて居るだらうと、大勢で稚子の後を追ひかけて來た。豊若丸は多勢の者に追はれ／＼致し方もなく、とう／＼其處の瀧壺へ身を投げて死んだ、今その瀧を若宮の瀧と稱んで居る。折から其處を



通りかゝつた舟本右衛門太夫と云ふ侍が不憫に思つて行つて見れば、瀧口の石に一首の和歌が書いてある

百敷や雲井に名をは留めしに

をちこち瀧の泡と消ゆとは

それを見て侍は大へんに憐れがり、瀧壺の中から稚子の死骸を引き上げた。稚子は死んでも尙ほ両手に固く南京茶椀を握つたまゝで居た。その茶椀に誰が手をかけても容易に放さないのを、その侍は不思議に思ひ、自からそれへ手を觸れると容易くそれがころりと放れた。侍はそれを見て、稚子の魂が此の茶椀を自分に呉れたのかと喜んで押し頂き、その亡き骸を懇ろに葬つて後、その茶椀に手向けの水を汲んで御霊に供へて置くと、不思議な事に夏の空には水が凍り、冬の日には水が温む、侍はそれを見て益々有難く思ひ、社を建て神様に祀つて

若宮八王子と崇め奉つた。そしてその茶椀を泉に埋めて南京清水と名付け、若宮神社の御手洗にした。その南京清水は今日に至るも夏は氷のやうに冷たく、冬は湯のやうに温かいそうである。

豊若丸を追ひかけた村の百姓たちに、その後不幸が続いて起るので、そのお詫びに毎年秋のお初穂を持つて若宮様へお詣りにやつて来る。今の向方むかふたの犬垣内いんとと、新野の若宮田とは、その當時百姓達が崇りを恐れて若宮様へ寄進した所だそうである。

### 御霊八社の神

和田村木澤の八幡宮は俗に八社の神と稱ばれて居る。此れは昔遠山郷の百姓が一揆を起し、領主遠山家の一族八人を殺してしまつた。其の後八人の怨霊が屢々崇つて百姓たちを苦しめ



るので、此處に社を建て、八人の靈を鎮め祀つて八社の神と稱んだ、此れが今の木澤の八幡宮である。

七四

## 關 八 幡

大下條村和知野の權現城は關氏代々の居城であつた。天文十三年下條方の夜討ちにあつて落城し、城主の盛永初め妻子悉くが無慘の最後を遂げた事は歴史の傳へる所である。盛永はもとわが家に召し使つた下郎犬坊の鎗先にかゝつて亂軍の間に討死し、奥方のお萬様は今年五才の一子長五郎を抱へて、縁者を尋ねて落ちて行く身となつた。向方むかひかたの惣十郎はもと關家に恩顧の者であつたので、お萬様はそれに道案内を頼んだのを、心良からぬ惣十郎は二人を欺いて山の中へ誘ひ入れ、親子を其處で殺してしまつた。今お萬の伏所と云つて居る所がそれ

である。

百姓を虐めた領主への反感は致し方もなかつたが、非業の死を遂げた人たちの怨みは其處に残つた事と思はれる。惣十郎の家ではその後引き續いて起る凶事にお萬様親子の崇りを怖れ、社を建て、關八幡と崇め、毎年十月八日に盛んなお祭りを行ふ事になつた。

盛永を殺した犬坊は、御褒美を貰つての歸り途で、突然現はれた一匹の山犬に噛み殺された。不思議はそればかりでなく、關領の村々には、その後怨靈が崇つて疫病が頻りに流行つたので、到る處に關のお宮を建て、祀る事になつた。

此の外和知野でも三人の靈を祀つて關三社八幡宮と崇め、坂部にも亦お萬様親子を祀る關八幡宮が建てられて居る。





## 木澤の愛宕様

木澤村字御園みきの畑の中に愛宕様の小さい社がある。初め建てる時には東向きに建てたのだが、一ち夜の中に南へ向いて居ると云ふ不思議なお社であつた。

此れはもと、遠山家の没落の時、土佐守の若殿が一揆に圍まれて討死をした。家來の者がそつと其の亡き骸を抱いて來て此處へ埋め、墓の標に丸石を一つその上へ載せて置いた。それを知つた村の人たちが後世を弔つて小さい社をその上に建てたのが即ち此の愛宕様であつた。遠山様を祀つた八幡宮が南の方にあるので、愛宕様はそれを慕つて南へ向きたがるのだと云ふことである。

## 一本さま

秦阜村やまふか字明島ひともとの一本さまは巡禮夫婦の靈を祀つたものである。昔此處の百姓の重吉が、仕事の片手間に茶店を出して居た。其の重吉の處へ宿を借りた夫婦の巡禮が、同じ宿に泊り合せた旅人のために殺された。丁度盆の十六日の夜の事であつた。下手人の旅人は天龍川を渡つて何處へか行く術を暗ましてしまつた。村の人たちは殺された巡禮夫婦を氣の毒がり、その亡き骸を懇ろに丘の上へ葬つてやつたが、非業で死んだ人の崇りは怖わかつた。其處へ小さい社を建て、神様に祀つて一本さまと稱び、春秋二度のお祭りをする事になつて居る。

## 弓矢天狗の話



神原村の坂部さかべに昔大泥棒があつて、一郎左衛門と云ふ者の一家七人を殺して逃げ去つた。殺された七人を葬つたのが今の七人塚。その時辛うじて生き残つた一人の子供が此の由を領主に訴へ、勇士二人の助大刀を得て路に待ち伏せをして敵の大泥棒を斬り殺した。其の後しばらくの間は何事もなかつたが、そのうちに不思議な事がその家に始まつた。ある日、家内の者が夕方野良から歸つて来て見ると大入道が家一杯になつて居た。又或る時は家が鳴り響いて、圍爐裡の中から熊手のやうな手が出て来る。銀のやうな髪の毛の婆が齒を噛み鳴らし怖い眼をして釜の上から八方を睨めまわす。こんな事が度々續くので人々は恐れおのゝき、七日七夜の御祈禱をし、弓矢天狗と崇め尊び、小さいお宮を建て、神様に祀つてやつたので漸く不思議がやんだと云ふ。

### 大蛇を殺した犬神様

昔和田村に一人の獵師があつた。或る朝早く池口山へ登り、杉の樹陰で夜の明けるのを待つて居ると、伴れて行つた獵犬が何を見付けたのか矢釜しく吠へ立てる、獵師がいくら叱つても益々暴れ狂ひ、果てには噛み付きそうに暴ばれるので、獵師はてつきり氣が狂つたものと早合點し、腰の山刀を引き抜き犬の首を切り落した。するとその頭が宙を飛んで行き、彼方の松の樹の下枝に飛び付いた、と見る間に大きな地響きがして何物か落ちて來た。獵師は不思議に思ひ、明け方のうす明りに透かして見て驚いた、丈にも餘る大蛇の首に、獵犬の頭だけが確かりと喰ひ着いて、それを噛み殺したのであつた。獵師は犬の忠義に感じて自らの粗相を詫び、涙を流してその死骸を懇ろに葬つた。その後山の麓に社を建て、神に祀つて犬神様と崇めて居る。



## 風の神の三郎様

八〇

南向村には丸尾、西丸尾、黒牛、谷田、下谷田、神又など云ふ部落があつて、それを總稱して北山方と稱んで居る。昔の話、大暴れがして、風の神の三郎様が獅子に追はれて黒牛に乗つて此處まで遁げて來た、そして今でも残つて居る山の中の洞穴へ飛び込んだ。獅子も此處までは追つて來ずに途中で引返へしてしまつた、黒牛と云ふ地名はそれからして初まつたそ  
うである。黒牛には其の時獅子が休んだと云つて、石に爪の跡の付いて居る所がある。黒牛では其の洞穴を奥の院にして三郎様を祀り、金物で拵らへた七五三繩と御幣とを奉納して置いた。然る所、同じ村の日曾利部落ひつそりの者がある夜三郎様のお宮に忍び、金の七五三繩と御幣束とを盗んだので大暴れが初まつた。黒牛ではびつくりし、易者に占つて貰ふと、此れは三郎

様のお怒りだと云ふ。お宮へ行つて見ると、七五三繩と幣束がない、耕地中大騒ぎで詮索の結果、漸う犯人を見付け出し、盗んだ品を三郎様へ返へしたので、漸く神様のお怒りが解けて暴れが靜まつた。此の北山方と中組との間のミヤノリ坂に祀つてある北山方のお宮では、これ迄毎年の祭典の時獅子舞ひをする例になつて居たが、三郎様を祀るようになつてからは、獅子を出すと三郎様が暴れると云ふので、それからは獅子舞を止めてしまつた。

## 滿仲を助けた八幡様

南箕輪村字殿島に鎮座まします八幡様である。

昔戸隠山に惡鬼邪神が立て籠り、民百姓を苦しめるとの注進が頻りに都へ聞えるので、時の天皇は源滿仲に命じて征伐に向けられた。滿仲は勅命を蒙つて直ちに出發し、遙々信州までや



つて来て戸隠山退治にかゝつた所、悪鬼共の威勢が仲々に強くて容易に手におへないので、満仲はいろくと思案の末、岩清水の八幡様を此の地へ勧請してお宮に祀り、七日七夜を祈願して神様のお助けを受け、それで漸やく戸隠山の邪神を退治する事が出来た、今ある八幡様はその時の有難い神様だそうである。

### 大六天神のお宮

西箕輪村字第六天林の大六天を、今は西山神社と改名して居るけれども、お宮の出来初めは俗稱大六天様であつた。大阪陣の時、此の土地の百姓の何がしが領主のお伴をして大阪表へ戦争に赴き、戦場のまん中で大六天神の金の幣束を拾つた。これは何よりも有難いものが授かつたと大切に懷中に納め、やがて戦争がすんで無事に凱旋したので此處へお宮を建て、お

祀り申したのが此の大六天様であつた。

### 高鳥谷山の猿田彦

高鳥谷神社は伊那村字火山の高鳥谷山に祀られて居る。昔此處の貝沼の里に井上掃部と云ふ侍があつた。或る日獵に出かけ、山深く分け入つて獲物を捜して居るうちに、黒雲がにわか湧き立ち、雷電は天地をとどろかして鳴りわたり、やがて大暴風雨となつて天地がまつ暗になる騒ぎ、掃部は途を見失つて山の中に迷ふ事二日二夜、身體全く疲れ果て、今は倒れるばかりになつた。そこで掃部は日頃信仰して居る猿田彦神を心の中に念じ、若し此の危難を助け給はゞ高鳥谷の山の頂きに社を建て、お祀り申さんと祈願を凝らした。すると程なく雨が歇み風も靜まつたので、掃部は神の助けと大いに喜んで居ると、何處からか山鳥が一羽掃



部の前に下り立つた。掃部はこれを見て捕へようとする、その山鳥は少しづつ、逃げて行く、掃部は尙ほそれを捕へようとして跡を追ひかけて行くうちに、知らぬ間に我が家の門前に入る事が出来た。掃部は神明の靈驗をおそれかきこみ、此處へお宮を建て、猿田彦の神をお祀り申したものだと言へられて居る。

### 熊野三社の大鉞

河南村の字小原に熊野三社が祀られて、そのお宮の寶物の中に鉞が一挺ある。壽永の昔、源平の戦ひに打ち敗れた平惟盛が紀伊の熊野を逃げて遙々と此の地へ落ちて來た。そして山中に難儀をして居る所を計らずも通りかゝつた仙人のために救はれた。惟盛は此處の隠れ家にしばらくの間住まひ、小さな社を建て、熊野神社の遙拜所として居た。村の人達が此の社

を修理して熊野三社を崇め祀る時、惟盛は御禮のしるしとして記念の大鉞を一挺寄進した。此の鉞、何時の頃にか紛失してしまつて今ではその代りの品になつて居るのださうである。

### 熱田神社と大蛇の骨

昔日本武尊が東夷征伐の歸りに、甲斐の酒折宮から山坂を越えて美和村の溝口へおいでになつた。その頃三峰川の上流に大蛇が住まひ、折々出て來て人を害し、百姓の難儀は一通りではなかつた。尊は此の話しを聞き召して大へんに氣の毒に思はれ、ある日噂のある川上へ行つて見ると、案のじやう大蛇が鎌首を擧げて尊をたゞ一と呑みと向つて來た。尊は直ちに劍を抜いて立ち所に此れを退治なされた處、大蛇の血が河原を眞赤に染めたと云つて、今其處を赤河原と稱んで居る。百姓達は其の後尊の恩澤を慕ひ、此處に尾張の熱田神社を勧請し



て立派なお宮を建てた。その時境内の樺の大樹の下から大蛇の白骨が現はれたので、一しよにお宮に納めてお祭りをした、今日お宮の寶物となつて居るのが即ちそれである。

### 守屋神社

藤澤村字北片倉には物部守屋<sup>おほむらじ</sup>大連を祀るお宮がある。昔大連の後裔が此の地へ来て住まひ、子孫代々繁昌して此處に祖先大連を祀つて産土神とした。それだから此の土地の者は皆守屋の姓を稱して居るのだと云つて居る。

### 千鹿頭明神

朝日村字樋口の郷社荒神社の境内に祀られて居る近戸社は、昔は俗に千鹿頭<sup>ちかづか</sup>と稱ばれて居た。上代此所が諏訪様の御領分であつた頃、健御名方神は屢々鹿狩りをして此の地へまゐられ、澤山の鹿の頭を切つて埋めた所であると云ふ。後に此所へ社を建て、健御名方神を祀つて千鹿頭明神と稱したと云はれて居る。

### 龍宮塚の椀貸穴

中箕輪村松島の北の端れに瓢形の古墳があつて、これを王塚と稱して居る、敏達天皇の皇子頼勝親王の墓だと傳へられて居るが、それは分らない。その傍に龍宮塚と稱ぶ小さい塚があつて、その蓋石の下が穴になりそれが龍宮まで届いて居ると云ふのである。お客のある時、龍宮へ頼んで入用の膳椀を貸して貰ふので大へんに重寶がられて居た所、一度借りたお椀を



毀したまゝで返さなかつたために、それからは如何に頼んでも貸して呉れぬようになつたと云つて居る。

### 聖 權 現

河南村の山の頂きに聖權現ひんがらがあつて青牛道士を祀つてある。昔一人の老人が何處からともなく来て、此處に庵を結んで住まつて居た。髪を長く垂らし、頭巾を被り、常に青牛に乗つて居たので青牛道士と稱んだ。犬を二匹飼つて居て、その犬が毎日町へ出て來ていろ／＼の用を達して居た所が、或る時山犬に喰ひ殺されてしまつてからは、道士自ら牛に乗つて町へ出て來たそうである。而し誰も道士の終りを知つて居る者はなかつた。その庵の跡には泉が湧いて居て、日照りつゞきで困る時には此處へ上つて此の泉に雨乞ひをすると必ず雨が降ると

云はれて居る。今其の跡に祀つてあるのが聖權現である。

### 樋口の八王子社

朝日村字樋口に素盞鳴尊の御子八柱の神を祭ると云ふ八王子社がある。昔此處の荒神山が崩れて湖水の水が天龍川に流れ、湖水の底であつた辰野が水が涸れたため平地になつた時、大へんな疫病が村々に流行り出した、占つて貰ふと湖水に住んで居た大蛇が家を失くして往き場がないために祟るのだと云ふ、そこで素盞鳴尊の御子八柱の大神を此の地に齋き祀つて禍を祓つた爲めに疫病は間もなく静まつた。その後も悪疫流行の時には此の神に祈れば必ず効驗があると云ひ、遠方からも參詣に來る者が多いそうである。



## 人身御供の話

九〇

### 靈犬早太郎物語

赤穂村の街より三十町、駒ヶ岳の東麓に光前寺がある。叡山の末寺で信濃五ヶ寺の一つと云はれて居る。縁起によると貞觀二年、慈覺大師の弟子の本聖上人、東に下つて此處に錫を駐め、草庵を結んで法を修む、一夜靈夢に感じ太田切川の上流にある大瀧の水底から不動様の尊像一體を得た、よつて此處に一寺を建立して不動尊を祀る、と云ふのである。此の寺の境内に靈犬早太郎の墓があつて有名な兵坊太郎の傳説が残つて居る。

花園天皇の頃の事と傳へられる。駒ヶ岳の山犬が光前寺の椽の下で子を生んだ。子供が大きい

くなつて親犬が山に歸る時、和尚が欲しがるまゝにその中の一匹を寺へ残して置いた。和尚此の子犬に早太郎と名付け、可愛がつて養育して居ると、それが珍しい忠犬で而かも大へんにきつい性質であつた。

その頃遠州の府中にある天満居の祭禮には昔から人身御供の習はしがあつて、白羽の矢の立つた家の娘が毎年一人づゝその人身御供に立たねばならなかつた。ある夜一人の六部がお社の椽の下に眠つて居ると、眞夜半に拜殿の上で不思議な音がする。そつと覗いて見ると姿は見えぬが聲だけは聞えて

信州信濃の光前寺

兵坊太郎に此の事知らすなストントン

何か怪しい物が來て踊つて居る様子である。

六部は怖ろしさに縮み上つて人心地もなく夜を明かした。明くる日、六部は飛ぶやうに村へ







前寺の初めであつた。それからしては寺の和尚は毎日不動の瀧までお勤めに上ることに決め、一日として缺かした事はなかつた。今日も和尚は常のやうにお瀧の方へ上つて行つた。留守居を云ひ付かつたお小僧は虫の知らせとでも云ふか、和尚の身の上に變事でもなければよいがと心配しながら待つて居たが、日が暮れても和尚は遂ひに歸つて來なかつた。そこでお小僧は心配のあまり殊勝にも和尚を捜し求めて瀧の方へ上つて行つた、そして瀧の近くへ來て見ると和尚は虫の息になつて倒れて居た。お小僧はそれを見てびつくり仰天し、一時は氣も轉倒してしまつたが、漸く氣を取り直し大聲で和尚を呼ばつて見た、すると和尚は細い息の下から小さい聲で、あゝ小僧か、わしはもう駄目だ、狒の毒氣に當てられて到底助かる見込みはない、わしの亡くなつた後は寺をよく守り、狒を退治してどうぞ仇を報いて貰ひたい。此れだけは是非共たのむ、と云つて和尚は死んでしまつた。お小僧は泣く／＼和尚の亡き骸を背負ひ、山を下つて寺へ歸り泣き臥して居ると、一人の山伏が一匹の犬を連れて通りかゝり、

お小僧に話を聞いて大へんに氣の毒がり、そのお小僧を案内にして瀧の下まで來て見ると、果して瀧の傍の岩の上に怪物が一つ、火焰を吐いて今にも躍りかゝりそうな様子をして居る、山伏はそれを見て犬の紐を解いてやると犬は猛然と牙を嚙んで、怪物を目がけて飛びかゝつた、すると怪物は犬を避けて空へ飛び上つたと見ると、そのまゝ姿が見えなくなつてしまつた。致し方なく二人は山を下つて懇ろに和尚を葬り、犬はそのまゝに此の寺に置くことになつた。これが即ち兵坊太郎だと云ふのであつた。

## 姫宮の狒退治

上郷村宇野底の奥の姫宮は、人里離れて昔より大木生ひ茂り、晝なほ暗くして平常には人も通はぬ寂しい所であつた。そのお社の年に一度の祭禮には、年頃の娘を人身御供に奉るのが



例になつて居た。若しも人身御供を供へない時は、神様のお腹立ちで其の歳一年は田畠を荒されて作物が穫れないので、それが怖さに毎年人身御供を供へて来た。祭の前日の朝早く、家な棟に白羽の矢の立つた家では是非とも娘を神様に差し上げねばならぬ掟になつて居た。或る年の祭りの時、丁度その朝屋根へ白羽の矢の立つた家では、娘を中にして親子が涙にくれて悲しんで居た。折から一人の旅の侍が通りかゝつて此の様子を見、わけを尋ねると娘が人身御供にやられるのだと云ふ。そこで其の侍（岩見重太郎だと云つて居る）は家内の者に『拙者は旅の者で、はからずも今此處を通りかゝつて不思議な話を聞いた、若しもそれが眞の神様ならばそのやうな無慈悲なことはなさるまい、察するところ、それは必ず野干變怪のものゝ仕業に違ひない、今夜は拙者が娘御に代り人身御供になつてお宮へ赴き、その悪る物を退治して進ませよう』と云ふ。

それを聞いて村中の人たちまで掌を合はせて喜んだ。その夜その侍は豫ねて用意した白木の箱の中へ大刀を提げて身を忍ばせた。すべてを娘が人身御供になつたやうに拵らへて、姫宮の神殿に其の箱を供へて置いた。人里遠く離れた山奥の、古いお宮の拜殿の箱の中に、その侍は刀を抜いて時の來るのを待つて居た。

やがて夜は次第に更けて、梢を渡る風の音に雫がはら／＼と散ると、遠い溪川の水音が夜の闇の間を微かに聞えて來る。丁度眞夜半と思ふ頃、山を踏み分けて忍び寄る怪しい物音の次第に近付くのを耳敏く聞き咎めた侍は、箱の隙間から見透した。大きな黒い影がヌツと拜殿の上に現はれて箱の蓋に手を掛けた。その途端に侍の鋭い刃が怪物の喉の邊を拳も通れと差し貫く。侍は箱の中より躍り出て切つて切つて切り捲くり、やがて怪物は深傷を負ふて呻きながら山の奥へ逃げ去つた。

夜が明けて村の人たちが怖る／＼お宮へ來て見ると、侍は無事に皆の者の來るのを待つて居た。大勢で血の痕を辿つて山の方へ分け入つて見ると、大きな岩陰の洞穴に、年經た大狒が鮮血



に染まつて斃れて居た。人身御供はその年からしてなくなつた。

## 湖沼に關する話

水  
と  
蛇

### 蛇出しが池

昔波合村字恩田の一人の百姓、家の裏手にある沼に此の頃草が澤山に茂つて來たので、ある日それを刈り取つて來て馬の飼秣にやつた所、その馬が草を食べると俄かに苦み出して、やがて血を吐いて死んでしまつた。人たちはそれを見て、此れは人の怖がるあの沼の草を刈つ

て食べさせた祟りであらうと云つて恐ろしがつた。

翌朝その百姓が不圖裏へ出て見ると、昨日の古沼が何時の間にか大きな池になり、青い水がひた／＼と岸を打つて湛へて居た。百姓は此れを見てびつくりし、此れは沼に住むヌシの仕業にちがひないと始めて氣がつき、早速その畔に祠を建て、ヌシの蛇を神様に祀る事になつた。これが即ち蛇出しが池である。

蛇出しが池のヌシは神様に祀られて、それから暫らくの間は何事もなかつた。それからして何年か経つたある夜、池のヌシが其の百姓の枕神に立つた。

『蛇出しが池では長い間お世話になつた、此の頃は體が池一ばいにひろがつて住み憎いから、蛇峠の上へ新しく池を作り、明日はそちらへ越したいと思ふ。今夜はそのお分かれに來た』

と云ふ。百姓は不思議な夢を見た。翌朝、夜の明けるのを待ちかねて池の畔へ行つて見る



と、いつもは静かな池の面が今朝は何となく騒がしく、岸一ぱいの水は横波を打つて、水の底から何物か湧き上つて来るやうな氣配であつた。波は見る間に次第に高まつて来て、やがて一と揺れ逆さまに揺れたかと思ふと、池の上にヌシの大きな姿が見えた、百姓が眼をまわして居る間にヌシは其のまゝ蛇峠の方へ黒雲に乗つて消えて行つた。ヌシの居なくなつた蛇出しが池は、再びもと通りの沼に變り、草の生へ茂るに任かせてある。

## 蛇峠の池

波合村の南に當つて高く聳え立つ山が蛇峠で、其の山の頂に昔大きな池があつた。その池にはヌシの大蛇が住むと云はれて蛇が池と稱ばれて居た。

ある日、峠の方から見慣れぬ小娘が下りて来た、そして村の庄屋の家へは入つて行つた。

『峠の池ではながく御厄介になりました、今日から深見の方へまいるので、お暇乞ひに來ました、御氣嫌ようお暮しなされませ』と云ふ。

庄屋の家では不思議な事に思つた。村の中にこんな娘はない筈だ、それが馴れ／＼しく暇乞ひに來たのはどうした譯か、と、誰れにも合點がゆかなんだ。家の人たちは門口へ出て、その小娘の後姿の去つて行くのを見守つて居ると、波合川へ架かつた橋の途中で娘の姿がふつと消えた、その途端、川の瀬音が俄かに高まつて大水が流れ落ちて行くやうに見えた、それで初めてその小娘は蛇が池のヌシの化身と知れた。

その日大下條村深見の里へ大きな池が一つ出來た。蛇峠のヌシの大蛇は娘の姿をして深見の池へ越して行つたのであつた。

蛇峠の池には水が今でも靜かに眠つて居る。それを今では雨乞ひ淵と稱ぶ。早魃の時、此の池の水を汲み來つて神に供へ雨を祈ると必ず雨が降る。村の人たちは水出を怖れて平常は一



切この池の水を汲まぬことにして居るそうである。

### とうぢやげの池

下伊那の南端神原村字唐澤の奥の入り、俗にトウヂヤゲと呼ぶ所に昔大池があつた。ヌシの大蛇、時々出で、水の出口を塞ぎ、そのために河の水の干上ることが度々あつたので、その河のある所をから澤と稱ぶやうになつた。ある年大雨の時、池の堤が崩れて河水汎濫、池の水がなくなつてしまつた爲めにヌシの大蛇は居所を失ひ、深見の池へ逃げて行つた。深見の池へヌシが來てから、近くの寺では鐘を撞くことを止めた、鐘の音を聞くとヌシが暴れ出すからだと云つて居る。

### 檜原川の甌穴

根羽村から三州の津具へ越すには、檜原川に沿ふて溪合ひを上つて行く。所謂檜原峠が此れである。其處の通稱釜の入りと稱する所に、直經二尺に餘る洞穴が、昔から底知らずで、龍宮まで續いて居ると云はれるのが幾つも並んで居る。檜原川の水が絶えずそれへ流れ込んで、それが何處へ抜けて行くか分らぬ。穴のヌシは黒體龍王で、時々穴の中からその黒い姿を見せると云ふ。石を投げたり、穴の口を塞いだりすると、何時でも黒雲が忽ちに舞ひ起つて大暴れがすると云つて、百姓たちは常に恐れて傍へ一切寄り付かぬことにして居る。

### 黒石明神



上久堅村の知久から千代村へ越す一本道の中程に、黒石と稱ばれる大岩があつて、その岩の割れ目の中には常に蛇が住んで居ると云はれて居る。これはもと沼の底にあつた岩であつた。

此の附近を今では横根田圃と稱んで居るが、其處は昔大きな沼で、その中にはヌシが住まつて居た。ある日、村の娘が沼にある船の中で遊んで居ると、その船が何時の間にか自然に動き出し、沼の中程と思ふ所まで來ると船は急に娘もろ共に沼の底へ沈んでしまつた。それを見て居た人たちは、沼のヌシの仕業にちがひないと云つて恐ろしがり、沼の近くへ行く者さへもなくなつた。

しばらくすると其の娘が村の百姓の夢枕に立つた

『どうか此の沼の堰を切つて水を干して下さい』とたのむ。

それが毎夜のやうに續いたので其の百姓も不思議に思ひ、村の人たちに相談をして沼の堰を

切つた。やがて水の乾いた沼の底から大きな岩が一つ現はれて來た、それが此の黒石であつた、そして其の岩の下に小蛇が何百となく居たのを見て百姓たちはびつくりした。

此れはもうずつと昔の話であつたが、今でも此の岩の中程にある割れ目の中には小蛇が常に住んで居ると云はれ、村の人たちは此の黒石に娘の靈を祀つて黒石明神と崇めて居る。

## 瀬戸淵の主

波合村を貫いて流れる波合川の下流に瀬戸淵と稱ばれる淵があつて、その水底は深見の池に續いて居るそうであるが、其處に住むヌシは一匹の大蜘蛛であつた。ある日一人の百姓、岸の石へ腰をかけて釣をして居ると、何處からともなく一匹の小蜘蛛が出て來て、細い銀色の糸を吐いてその百姓の足を岸の樹の根へ十重二十重に絡らめ着けた。百姓が漸くそれと氣付



いた時、水底の方で『ヨイシヨ』と云ふ掛け聲が聞えて、そのまゝ百姓はする／＼と水の中へ引き込まれてしまつたそうである。

## 大蛇が池

平岡村字宇連すれの今小學校のあるあたりは昔は大きな池で、青く湛へた水の底には大蛇が住むと云はれて人たちは怖がつて居た。ある年大地震が起つてその池の堤が崩れた時、ヌシの大蛇は池を抜け出で、和知野川を下つて天龍川へ出て、河の流れを溯つて行つた。その時は水の上に大きな横波が打つて、大蛇の背中の鱗が折からの夕陽にきら／＼と金色に光つたと云ふ。

天龍川を上つた大蛇は大下條村の深見へ行つて、其所に大きな池を作り、それからは其の池

に住むやうになつた。今の深見の池が即ちそれである。

## 畑た池の女

下伊那の南端、遠山かどむらの上村字中郷の山の中腹に昔大きな池があつた。樹立ちが四方を取り圍んで晝でさへも小暗く、碧く湛へた水は深く沈んで、何時とはなしにヌシの大蛇が住むと云はれて居た。

ある年の秋、此の山の木を伐つて畠を開こうと、百姓たちは村中總出をして此の池の端へ集まり、片はしから木を伐り初めた。太いのは里へ運んで材木にし、残りの落葉や小枝を掻き集めて小山にしたのへ八方から火を付けた。白い綿のやうな煙が風に靡いて池の面を包み、朦々と擴がつて渦巻き上る。百姓たちが火を遠巻きにして取り圍み、山の上の方を見て居る



と、今しも小山の崩れるやうな濃い煙の巻き立つ上に、両手で顔を被ふた女の姿がちらと見えた。煙の上に乗つた其の女の体を再び煙が一ぱいに包んで渦巻くと、その煙の中に聲がして『あゝ煙たい』と叫ぶ。

やがて煙が消えて廣々と見渡す焼跡に百姓たちは狐にでも魅<sup>ま</sup>まれたやうな顔をして呆然として立つた。今まで眞つ青に見えて居た大池は何時の間になくなって、其處には落ち葉の灰がうづだかく積み上つて居る、そして不思議や山の頂上に新しい池が一つ。

百姓たちはヌシの仕業だと云つて恐れ、急いで池の畔へ社を建て、池神社と稱<sup>な</sup>へ、池のヌシを神様に祀つた。今日ではそれが雨乞の神様になつて居る。

## 野が池

○

大鹿村大河原の字上藏<sup>いさう</sup>より約半里、北方に當る山の中腹に古い池が一つ、此のあたりは古木が鬱蒼として茂り合ひ、日の光さへも洩らさねば、梢より滴り落つる雫は雨となつて、石は滑かに苔は冷たく、千年の眠りのまだ其のまゝに残つて居そうな所である。そのまん中に昔の色を其のまゝに、靜かに横はる古池を野が池と稱ぶ、大蛇が住むと云ひ傳へて昔から怖<sup>こ</sup>がられて居た池であつた。此の池を斜に被ふ古木の根元に暗い洞穴がある。池には流れ込む水もなければ又流れ出る水もない、しかもその洞窟より湧き出る水が瞬く間に池に満ち溢れるかと思へば又忽ちに枯れる、昨日は池に一ぱいの水が溜まつて居たかと思れば、今日は底も見えるまでに減つてしまつて居る。此の不思議を村の人たちは池に住む大蛇の仕わざだとし  
て恐れて居る。



## 大蛇が城

一一〇

大島村字古町の南端、天龍川に臨んだ要害の地に、高く石垣を築いて聳ゆる城を臺城と云ふ。天龍川の水が城の櫓の下に渦巻いて、自づと作る千尋の淵に、何時の頃よりか大蛇が住むと云ひ傳へられ、城の名も大蛇が城と稱び馴らされて居た。

鶴の毛程の雲もない晴れたる朝、水煙が朦朧と城の櫓に立ちこめる事がある。淵の上より立ち昇る水氣が霧の雨となつて城に降りそゞぐのを見る人たちは、淵の大蛇の仕業だと云つて、不吉の前兆で、もあるやうに恐れて居た。

天正十年の春、南の國境を越えて伊那に侵入した織田信忠の軍勢は、嵐の枯れ葉を捲くやうに行く先き／＼の諸城を陥れ、愈々此の大蛇が城を包圍した。數多き戰場に名譽を誇つた武田菱の旗指し物も、今日は孤城の上にやがて來るべき落城の日を待つばかりになつた。

敵が山の上より射かける火箭に城の彼所此所から火の手が上がる、すると不思議にも淵の水が渦巻き上り、水の底から大蛇の姿が現はれたと思ふと、俄かに淵の水が雨となつて忽ちに城の火を消してしまふ。幾度城に火をかけても、その都度大蛇に消されてしまふので、織田勢は城を落すには淵の大蛇を殺すより他はないと、射手を揃へて隙間もなく淵を射た。しばらくすると淵の面に大波が狂ひ起つて天地晦暝の大雷雨、やがて雨の歇んだ天龍川の水を眞赤に染めて、射殺された大蛇は淵の底深く沈んで行つた。城は間もなく敵に焼かれて焔の裡に落城した。今でも城跡の畑を掘り起すと眞黒い焼米が出て來るそうである。

又一説に、城兵は淵の大蛇が城に向つて吐く水煙の不吉を忌んでこれを射殺した。不思議の守護を失つた城は間もなく敵に攻め落された、とも云つて居る。

一一一



## 深見の池

一一二

池や沼に残る幾多の蛇の物語は、その話の筋を辿つて行つて見ると、深見の池について居るものが其の数なく／＼に多い。而かも其れ等の物語の池や沼も、たゞ其の名のみが残つてもとの姿のなくなつたものゝ多い中に、此の深見の池のみは昔のやうに今もなほ幾多の物語をその水底に抱いたまゝに青く澄み湛へて居る。今その水の中から拾ひ上げた話を記せば次ぎのやうである。

### その一

むかし川路村に、貝鞍かいくらが池と稱ぶ大きな池があつて、ヌシの大蛇が住むと云はれて居た。こんな所を池にして置くのは勿體ない。埋め立て、新田にすればお米が澤山に穫れる、と云ふや

うな話が百姓たちの茶話の話題に上るようになった。話が次第に熟してやがて村の總寄り合ひが催され、愈々かいくらが池埋め立ての相談が決定した。貝鞍が池が埋められるやうな、と云ふ話は忽ち村中へひろがつて、人たちは今更のやうに久しく見馴れた池を眺めるやうになつた。ヌシが居るそうだが、と村の年寄たちは心配そうな顔をしてひそ／＼と語り合つて居た。平常は靜かな池の水が、此の幾日かはどうも穩かでないと言ふ者があつた、池の中に時々横波が立つて岸にひた／＼と打ち寄せるのはヌシの故せいではないかと恐れる者もあつた。いよ／＼埋め立て着手の日が決まり、その日になると朝早くから百姓たちはめい／＼に穫物を持つて池の畔へ寄り集まつて來た。

丁度その頃と思はれる時分、見馴れぬ美しい娘が一人、天龍川の川傳ひに道を急いで下つて行くのがあつた。川路村から大下條へ、道はなりに遠いが娘の足は早かつた。深見の里には麥が青々と肥えて今日も長閑であつた。娘は道端の百姓家の軒に立つて音づれる



『遠い旅の者で御座います、不憫と思ふてどうぞ使つて下され』とたのむ  
 『見るとうりの百姓家故、此れと云ふ用事もないが、まあ／＼當分此處で遊んで行かつしや  
 れ、遠慮はいらぬ』

田舎のお神さんは親切であつた。娘はそのまゝ其の家の人になつて丁度三日目の朝、井戸へ  
 水汲みに行つたまゝ晝になつても歸らぬ。假の姿を娘に借りたヌシの大蛇が水を慕つて再び  
 もとの姿に復つた事は、井戸端に脱ぎ捨てた赤い花緒の下駄より他には誰も知る人がなかつ  
 た。組合衆が寄り集まつて井戸さらへをして見たが、娘はおろか、髪の毛一と筋も沈んで居  
 なかつた。

それから間もなくであつた。ある日、晴れた空が俄かに曇つて黒雲が空一面に擴がると見る  
 と、その雲の間を縫ふやうにして幾條もの稲妻が閃く、やがて大雷雨が車軸を流して深見一  
 面を眞黒に包み、天地晦暝の裡に百姓たちはひれ伏して震へおのゝいて居た。間もなく雷鳴

が止み、雲が薄らいだのでほつとして眺めると、今迄青々として茂つて居た麥田が見渡す限  
 りの池に變じ、大きな波が岸を打つて逆巻いて居る。この意外な大異變に喫驚した百姓たち  
 は神威を恐れ畏こみ、早速お祭りをして水の靈を慰める事にした。やがて雨が全く歇み空が  
 晴れわたつたので百姓たちは漸やく安堵の胸を撫で下ろした。

村では直ちに池の畔に諏訪明神を祀り盛大なお祭りを行つた。それから後は毎年筏を組んで  
 池に浮べ、囃子を催して池のヌシを慰める事になつた。

又この池へ毎年一度づゝ赤飯を盛つたひつを入れてやる、すると何時の間にか空になつて浮  
 いて来るそうである。池の底は遠く龍宮に通じて居るとも云ふ、そして此處にも他所にある  
 やうな椀貸穴の話が傳つて居る。



天龍川一帯の山々に栗の花の咲く頃であつた。村中總出の田植え時に一人の美しい娘が通りかゝつた、早乙女たちは村に見かけぬその美しい娘を仕事の手を休めて見送つて居た。村から村へとその娘は道を急いで下つて行つた。そして大下條村の深見へ行つて、其處の路傍にあつた古井戸の中へ飛び込んだ。その途端に地軸も摧けるやうな響がして、今まで青々と茂つて居た稻田が忽ち大きな池に變じたので、百姓たち一同は腰を抜かして驚いた。これは必ず龍神の仕業にちがひないと恐れかきこみ、早速祠を建て、盛なお祭りをした。毎年度の祭典には池の中へ筏を浮かべて賑かに囃子をする、その時若しも誤つて汚れた者でも乗る時には、龍神の怒りで筏がきつと沈むと云ふ。

## その三

昔川路村に大きな池があつた、随分古くからある池で、碧い水が一ぱいにたゞえた中に逆さ

まに映る樹の影、雲の影。村の人たちも怖がつて近寄る者もない程の池であつた。それが近頃此の池に不思議な噂が立つた、見馴れぬ女が赤兒を抱いて池の端に立つて居るのを見たと言ふ者があつた。髪の毛の長い、白い肌の女が、夕方池の邊に首垂れて居たと、顔色を變へて來て話した者もあつた。それはたゞ噂ばかりではなかつた。

夕日が落ちて黄昏の色が池の面に漂ふ頃、赤兒を抱いた美しい女が何處からともなく現はれて來て、じつと池の水に見入つて居た。長い髪の毛は背中に渦卷きの波を打つて裾までも曳いて居た。日が暮れると女の姿は掻き消すやうになつて、又次ぎの朝、池の端に昨日の女が佇んで居る。

そんな日が幾日かつゝいた或る日のこと、池の端を通りかゝつた一人の百姓はその美しい女に呼び止められた。

『見ず知らずの方に折り入つてのお願い、どうぞ此の兒を背負ふて深見の里まで案内して下さい』



され』と云ふ。親切な百姓は、請はれるまゝに赤兒を負ふて深見の里へ女を送る。女は幾度か池の方をふり返へりつゝ深見へ急ぐ。深見の里は風靜かに美しい日光を浴びて眠れるやうであつた。

先きに立つて道を急ぐ百姓が、不意の物音に驚いて振りかへると、女の姿はもう其處にはなかつた。そして道端の古井戸が俄かに水を噴き出して、見る／＼間に田を浸し畠を流して忽ち其處に大きな池が出来た。それと同時に川路の古池は知らぬ間に消えてひろ／＼とした田になつて居た。女の行く衛はそれ切り更に知れなんだ。あれは大蛇の化身で、池へ入つてヌシになつたにちがひないと人たちは語り合つた。

それからして何年か経つた。益平と云ふ漁師が池の上に舟を浮べて朧月夜に鮒を釣つて居ると、かすかな唄の聲が何所からともなく聞えて来る。不思議に思つて聲のする方へ漕いで行くと、何處まで行つても眠れるやうな朧月夜の水の面に、それかと思ふ影もない。じつと耳

を澄ますと、唄は水の中から湧いて来るのか、それとも空に迷つて漂ふのか、天地の間はたゞ朧月夜の淡い光が立ちこめて、その中を絲より細い美しい聲が水の面を聞えて来る。漁師が諦らめて舟を漕ぎ返へすと、唄の聲は矢張り遠くに離れ又近くに寄つて、何處で誰が何を唄ふのか、聲だけは聞えて唄の主は今だに知れぬと云ふ。

## その四

深見の池の水底には今でも大木が折り重なつて沈んで居る、これは池のまだ出来ない昔、此處が大きな森であつた證據だそうな、此れは其の頃の話である。

昔その森の陰に一軒の百姓家があつた、夜になると嫁と姑とで繰る絲車の音が寂しそうに聞えて居つた。

ある晩のこと、嫁が丁度まき上げた木綿の紡錘を姑に渡すと云つて、折から自在釣に白い湯



氣を立て、居た鍋弦の下をくぐらせると、不思議や鍋が俄かに大きな聲で唸り出し、それと同時に其の紡錘がしつかりと鍋弦に喰ひ着いて取れなくなつた。二人はびつくりして怖わ／＼そつと其の鍋を裏手の森へ投げ捨てたまゝ、後をも見ずに逃げ歸つた。恐ろしい一夜の明けのるのを二人は一睡もせず待ち明かした。

夜が明けて朝の太陽が東の山を離れる時、いつも障子に映る森の影が今朝に限つて見えないのを怪しみ、恐る／＼窓を開いて見ると千年の森が一夜の中に何處へ消えたか形も見えず、而かも其の跡に大きな池が一つ、岸一ぱいの水をたゞへて小波を打つて居た。

不思議な此の夜の話聞き傳へた村の人たちは、怖ろしがつて早速池の傍に祠を建て、神様に祀つた。それからしては忘れても紡錘は鍋弦の下をくぐらせるなど云ひ傳へて居る。

その五 ○

天正十五年下條氏は遂に没落した。下條氏には十二代二百餘年の長い歴史があつた。年若き下條康氏は飯田城主菅沼定利の拘禁を危く脱し、僅かの従者と共に身を以つて書神ひるがみに逃れ、次いで美濃路へ落ちて行つた。

吉岡城に居残つて其の知らせを聞いた康氏の母は、夜に紛れてひそかに城を抜け出し、しばしの間深見の百姓家に隠れて居た。間もなく訴人する者があつて身が危くなつたので、とても遁れぬ運命と諦めて井戸へ身を投げて死んだ、するとその井戸が一夜に崩れて大きな池になつた。

大蛇の姿になつた池のヌシはそれからして世を呪ひ、村中の田畠を荒らしまわつたので、百姓たちは崇りを恐れて祠を建て、神様に祀つて死者の靈を慰めることになつた。この池が出来てからは近所の寺では鐘を撞くことを止められた、鐘の音を聞くとヌシが怒つて暴れるか



らだと云ふ。

一一三

水の不思議

### 清内路の赤兒が淵

清内路村を流れる黒川の水が、岩に堰がれて深くたゞへて居る赤兒が淵の岸に立つて耳を澄ますと、水の底の方から赤兒の泣く聲が聞えて來ると云ふ。

昔伊賀良、山本のあたりに巢を構へて近郷を荒しまわつた夜盜の一群があつた。ある闇の夜に澤山の松明を梯子に結び付けたのを振りかざし。鉦大鼓を打ち鳴らして領主の館に押し寄せた。不意の夜討ちに狼狽した家來たちは、松明の光りを見て大軍が攻め寄せたと思ひ違

へ、驚き周章て、命からかく逃げ失せた。その時一人の下僕、領主の子供を背負つて邸を逃れ、漸やく黒川の端まで來て見たが、所詮このまゝには逃れぬものと觀念し、その兒を此の淵の中に投げ棄て、己れ一人だけ何處へか逃げ去つた。子供は死んでも魂だけは尙ほ水の底に残つて、それからして赤兒の泣き聲が聞えるようになった。岸の岩に今でも残る子供の小さい手の跡はその時の名残だそうである。

### 左京の赤子淵

水の底から赤兒の聲の聞えて來ると云ふ話は此方にもあつた。

秦草村字左京の赤子淵、此處でも夕方になると赤子の泣き聲が聞えると云ふ。昔赤ん坊を残して夫に先立たれた貧しい女、手足まとひの子供を抱へては何としてもその日が暮らせなく

一一三



なつた、思案の末に心を鬼にして或る夜ひそかに此の淵にその子を沈めてしまつた。その晩一と夜後悔に泣き明かした母親は、其の日の夕方そつと其の淵のほとりへ行つて見た、そして水底にあたつて確かにわが兒の泣く聲を聞いた。母親はそれを聞くと、も早何の躊躇もなく自分もその淵に身を投げて死んだ。それから後、夕ぐれ時になるとその淵の水底で赤兒の泣く聲が聞えるようになったと云ふのである。

### 機織り淵

平岡村みつしま満島の機織淵には美しい女の魂が沈んで居る。それで今でもその淵の岸に立つて居ると水の底から遠く微かに機を織る音が聞えて来る。或は高く、或は低く、紛ふ方もない機音が波を傳ふて聞えて來ると云ふのである。

むかし領主遠山土佐守に仕へた一人の美しい腰元が、ある夜ひそかに此の淵の底に身を投げて死んだと云ふ。何故死んだかはもう今日では傳へる人もないが、それには悲しい理由があつたのであらう。永久へに消え難い悲みの糸をたま經にして、それを涙のかさ椀が織つて行く。水の底に沈んだと云ふ美しい女が日毎夜毎に織るその機はどんな錦に織れたのやら、村の人たちは何のわけも知らずにたゞ機織り淵とのみ稱んで美しい女の哀れを今に語り傳へて居る。

### 和泉が淵に沈む鏡

智里村を流れる阿智川の和泉が淵には女と鏡とが沈んで居る。ある年の大旱魃ひでりに川と云ふ川の水は悉く涸れ切つて、田島は一めん干上がった。雨乞ひも御祈禱も更に何の甲斐もなく百姓たちも早や萬策つき果て、空しく手を拱いて干乾しになるのを待つより他はなくな



つた。

一二六

村の庄屋に美しい一人の娘があつた。百姓たちの此の悲しみを目の當りに見るにつけ、たゞ雨さへ降るならばと小さい胸を千々に碎いて考へた、命をすてゝ祈るなら、神様も加護して下さりませう、この身一つの力にて多くの人の命が助かるなら、生きるに勝る甲斐があらう。娘はやがて固く心を決めた。朝夕己が姿を映して吾が魂とも慈しむ鏡を抱いて、或朝早く和泉が淵の岸の上に立つた。卑しい此の身一つの犠牲いけにえにて神様の心が和らぎ給ふなら、どうぞ雨を降らせ給へ、わが魂の深く籠つた此の鏡の面に映る此の身の清き願を神よ照覽ましませ、と、娘は鏡を固く抱いたまゝ淵の底深く沈んで行つた。今まで僅かに淀んで居た水溜りの、此の時俄に水量を増して、娘の姿が水底に見えなくなつたと思ふ間もなく大雨が山から里へ、百姓たちが狂喜の中を瀧津瀬のやうに降りそゞいだ。和泉が淵の水底には今でもその時の鏡が沈んで居ると云ふ。

### 飲まぬ水

秦阜村きんのう金野の、通稱沼の水の水底は大きな一枚岩で、その上に袈裟の模様が痕になつてはつきりと残つて居る、昔此の川で一人の山伏が殺された、その時山伏のかけて居た袈裟が此處に沈んで何時までも恨みを残して居るのだと云ふ。村の人たちは山伏の崇こほりを怖がり、云ひ合はして此の水は飲まぬことに決めてゐる。此の飲まぬ水が今日の沼の水に變つたのだそうである。

### 涙霧

秦阜村打澤うつさわの部落で、向ひの谷へ昔赤兒を棄てた者があつた、赤兒の泣く聲は三日の程は聞

一二七



えてゐるが、やがて其の聲が聞えなくなるとその日から其の谷へ霧が立ち籠めて来た。今でもをり／＼此の谷に限つて霧のこもる時がある、それは赤兒の涙から立つ霧だと云ふ。霧がこもるときつと細い涙雨がしぼ／＼と降つて来る。

### かむろ水神

千代村字米川の禿が淵。兩岸の斷崖が深く迫つて樹木鬱蒼と生ひ茂り、其處に大きな洞窟が開いてその入り口に禿水神が祀られて居る。これは昔禿を祀つたものだといふ村の人々は信じてゐるが、これは村の雨乞ひ淵で、日照の年には若者たちが揃つて此の淵に入り、水を浴びて身を淨め、川原の廣場で鉦大鼓を打ち鳴らし、大きな環をつくつて雨乞ひ唄をうたひながら踊る。雨乞ひの踊がすんで七日の間に雨が降れば水神様へは赤い帯を奉納し、下流の入道淵

へは鏡を沈める習はしであつた。禿淵につゞく椀貸淵には昔お椀を貸した話が残つて居る。禿水神の氏子達は、祝儀などある時入用の膳椀の數を紙に認め、淵の中へ沈めてやると翌朝その品が注文通りに岸に揃へてある。用事がすめば又それをもと通りに淵へ返へす。ある時借りた椀を一つ損じて返へさなかつた爲めに、それ以來誰がたのんでも貸して呉れなくなつたと云ふ話で、此の椀貸の話は各地到る所の池沼などによく語られる話である。

### 駒が池の椀貸穴

大鹿村鹿鹽の梨原に俗に大池と稱ばれる古池がある。此の池に傳へられる椀貸しの話は、初めの所は他のと似てゐるが、終りの方が少しく違ふ。昔此處の庄屋の何がしの家で池から貸りた十人前のお椀の中、一つ粗そうして毀つたのを其のまゝに、残りの九つを池へ返へした所



その時に限つて二日経つても三日経つても沈んで行かぬ、それ故庄屋の家では又それを拾ひ上げ、家寶にしようと思つて置いた。すると間もなく池の水がにわかには溢れ出して、庄屋の家の廣い田地畑を押し流してしまつた。庄屋の家はそれから次第に傾いて行つたと云ふのであつた。

その後此の池から駒が一匹とび出し、向ふに高く聳え立つ山の頂上へ走つて行つた。それで其の山を駒が岳と稱んで居る。この不思議な池には葦が一めに生へ茂り、どんなに雨が降つても水量が増さぬ。池の底には大きな穴が一つあつて、それが何處まで續いて居るか分らない。駒はその穴から出たので駒が池とも稱んで居る。

### あめ鱒さらばよう

中澤村の奥、鹿鹽峠をかざわとうげと女澤峠をむざわとうげとから出る二筋の溪流が、一つに落ち合つて燈澤となり、其處が深い淵になつて夫婦淵と云はれて居る。村の者は此の澤へ網打ちに上るが、此の淵だけには昔から網を入れぬ事になつて居る。そのわけは此の淵の水は小半里も離れた雨乞ひ淵に續いてゐて、夫婦のあめ鱒あめますが住んで居ると云ひ傳へられて居たからであつた。

ある日、矢張り此の村の一人の男、人の止めるのも聞かずに夫婦淵へ行つて一と網打つた、網を手繰つて見ると素晴らしい手應へがして、大きなあめ鱒が一匹白い腹を出して網の中には入つてゐた。その男は竹籤の中から藤蔓を取つて來て魚の脰あびしに通し、肩へかけると魚の頭は肩の邊にありながら、尾は男の踵まで届いた程に大きかつたそうなる。

やがて其の男、あめ鱒を擔いで坂の上まで上りつめた時、後の方で悲しそうな聲がして『あめ鱒さらばよう』と呼びかけるのが聞えた。男も聊か氣味悪くは思つたが、そのまゝ家へかへり、



魚を料理して家内中で食べてしまった。それから二三日の後、その男は何とも分からぬ病氣に罹り、さんぐに苦んだ揚げ句の果てに死んでしまった。間もなく一家の者は離散して其の跡にはペンく草が生へ茂つて居た。

### あめ鱒岩の女

飯島村與田切川の下流にあめ鱒岩があつて、其處に大きなあめ鱒が住んで居た。ある日、川向ひの南向村字飯沼の何がしの家に祝ひ事があつて、大勢の人が手傳ひに行つて居た。その中に交つて誰も見たことのない顔の娘が一人、皆と同じやうに立ち働いて居たが、いよくお祝ひの客も終り、一同赤飯の御馳走に與つして家へ歸つて行つた。その翌朝村の一人が與田切川へ網打ちに行き、その岩の所で一匹の大きなあめ鱒を捕つた。家へ持ち歸り腹を斷ち割つて

見ると、中からまた消化れ切れない赤飯が澤山に出て來た。川に住むあめ鱒が昨日娘に化けてお祝ひの手傳ひに行つたと云ふ事が漸くそれでわかつたと云ふ。

### 徳本清水の話

伊那富村字今村に徳本の庵の跡と云ふのがあつて、其處の岩間から清水が滾々と湧き出て居る。徳本が薬に使用した水だと云はれ、一日に一度は今でも薬水が湧き出て來るそうである。むかし甲斐の徳本、薬袋を頸に懸け、長い杖を突き、貴賤を問はず一服十八文の薬を與へて病人を治療してやりながら、信濃へ入つた時はもう百歳を超えて居たと云ふ。此の地へ庵を結んでしばらく滞在、徳本様のお薬で治らぬ病氣はなかつたそうな、徳本様は百十八歳で諏訪でお亡くなりになつたと云ふが、其の後、此の清水の側の茶店で善光寺参りの旅人が急病



になつた、その時不思議のお告げがあつて、その清水を汲んで病人に飲ませた處、病氣が立ち所に治つたと云ふので徳本清水の評判は益々弘まつて行つた。

## 金鶏の話

### 井戸で鳴く鶏

大島村字古町の南端、天龍川に臨んだ高台が、昔の臺城の跡で、大蛇が居たと云ふので俗に大蛇ヶ城とも稱んで居る。その城跡に残つて居る古井戸の中から、鶏の鳴き聲が聞へると云ふ。

昔此の城が織田信忠の軍勢に取り圍まれ、城の櫓へ火をかけられて焔は炎々として燃え上る落城の間際、城の美しいお姫様が、大切な金の鶏を抱へて渦巻く烟の中を逃れて出たが、敵の雑兵に追ひつめられてとう／＼此の井戸の中へ身を投げて死んだ。城が落ちてからも長い年月が経つた。月の初めの朝、此の古井戸の中から微かに鶏の鳴く聲が聞えて来る。三聲づゝ鳴く其の聲は、昔お姫様に抱かれて井戸へ沈んだ金の鶏が鳴くのだと云ふ。今では元日の朝鳴くと云ふ事である。

### 鶏淵

下清内路から上清内路へは、一と筋道がうね／＼と、山の横腹を傳つて上つて行く。その道の左方、清内路川が大きな瀧になつて落ちる所が、底も知れない淵になつて渦巻いて居るの



を鷄淵と稱んで居る。

昔、此の上み手にお城があつて、戦争に負けて亡びる時、お殿様は秘藏の金の鷄を敵の手に渡すまいとして、此の淵の中へ投げ込んだ。戦はすんで川の水は相變らずもとのまゝに深く湛へて流れて居るが、其の時から後、水の底に當つて鷄の鳴き聲が聞えるやうになつた。それはお殿様の投げ込んだ金の鷄が鳴くのだと人々は思つて居た。

又此の淵は、水底が龍宮まで續いて居て、昔は膳や椀を頼めば貸して呉れたとも云つて居る。

### 開眼寺の銀杏の樹

富草村の栗野に、今は絶えてしまつたが、昔開眼寺と云ふ寺があつた。其の寺跡に大きな銀

杏の樹があつて、其の根元に明いて居る洞穴に耳を付けて靜かに聞くと、遠くの方で鷄の鳴く聲が聞えて來たと云ふ。そしてまた其の樹の附近には、黄金の寶が澤山に埋まつて居て、正直な、行の正しい者には御光が射して寶物が授かるとも云つて居る。因に、此の開眼寺のお薬師様は今其處の開昌寺の本尊様になつて居る。

### 朝日松

智里村の園原の中央に、背の高い松が二本聳え立つて居る、園原へ射す朝日は、先づ此の松の梢から照らすので一名朝日松、又は朝日に輝く夕日の松、などゝ稱んで居る。此の朝日松の名前の由來は、諸國に多い長者址と稱する所に遺つて居る歌の『朝日さし夕日かゞやく木の下に漆千盃朱千枚』とか、或は『朝日さし夕日かゞやく木の下に小判千兩有明の月』などの



歌からして、そう稱ぶようになったのであるかも知れぬ。此の朝日松の根元に金鶏の跡と云ふのがある。昔伏屋長者が都へ引つ越す時、秘藏の金の鶏を此の樹の下へ埋めて置いた。それからして後、毎年正月元日の朝、此の樹の下で鶏の鳴く聲が聞えるようになったと云ふ。

此の村では昔は鶏を飼はぬ事にして居つた、たとへ飼つても何故か育たないと云ひ傳へて居たが、併し今日はそうでもない。

### 南宮神社の森 附 くれ木踊り歌

『朝日 夕日』の歌は又秦阜村字温田ぬたの南宮神社の境内にもあつた。昔から此處には神様のお使ひの蛇が住んで居て、不淨の人には姿を見せないとも傳へられ、又此處には昔澤山の黄金が埋めてあるとも云はれて『朝日さし夕日かゞやく木の下に漆千本朱千本』の歌が口碑に

残つて居る。

神社のある小山の頂きを、通稱おはちと呼び、お不動様が祀つてある。此のおはちへ不淨の人が登ると、必ず何事か異變があると云はれて、今でも婦人は登る事を遠慮して居る。此の神社の脇が南宮淵で、昔温田家では田植祝ひの日、願文を紙に認めて此の淵へ投げ入れると、神様のお恵みで、入用だけの膳椀を揃へて貸して下さつた、祝ひが終ると直ちに此れを返へすのが常であつたのに、ある時誤つてお椀一つを破損したまゝ返へしたので、それ以來は貸して呉れぬようになった。

鎌倉時代、此處は南山五百石と稱した天領で、御上納は皆樽木を以つて納めた、當時樽木踊と云ふ踊りがあつて、次に記す様な歌を謠ひながら盛に踊つたものであつた。今でも毎年八月廿二日の祭典には此の謠を唄つて踊る。



くれ木踊り歌

東西しづまれ穩やかに  
しづめて小歌を御聞きあれ  
頃は天文御代のころ  
お上様より御發布で  
庄屋の指圖に集りて  
三百有餘の百姓が  
山へ登りて木を切りて  
南宮島へと送り出し  
天龍おくれ木下す時  
鎌倉殿なる御逼促  
こゝは時又川筋か  
通る筏に打ち乗りて  
こゝは温田の南宮の  
これにお登り遊ばして  
天龍川の真中に  
かけず崩れず岩立ちの  
さても堅固な宮立ちよ  
又も御鉢にお登りて

朝日輝く景のよき  
夕日たなびく風すゞし  
さはら千本杉千本  
こゝにおくれ木つみ下し  
南宮島の祭禮に  
おくれ木踊り行はれ  
向登山の浅いけで  
姫よこじよろが菅を刈る  
これで作ったさんど笠  
天龍下りのしぶきよけ  
これを神社にそなへ置き  
おくれ木踊りをとりそろへ  
踊る小供にうちさせて  
一ふしそろへてお目にかけてよ  
氏子のこらず集りて  
おうけいたした折柄に  
またも筏に打ち乗りて  
笠をいたゞきおかはりに  
これは信州ひの木笠  
これをおもちてしぶきよけ  
いざみなさらばと漕ぎ出で、  
迎へ送りのしぶきよけ



此の踊りの歌詞は同じ村でも大畑の方へ行けば大へんに違ふ。門前の歌、庭賞めの歌、神前の歌、笠やぶり歌と云ふやうに、それ／＼違つた歌詞で唄はれて居る。

## 湧泉の話

### 酒の湧き出た酒生澤

水が變じて酒になつた話は養老の瀧ばかりではなかつた。伊賀良村の二つ山に酒生澤さかしのさわと云つて、昔酒が湧いて流れたと云ふ所がある。

昔此の二つ山の麓に老人夫婦が住んで居た。爺さんがある日山へ上つて行つて木を切つて居

ると、何處からともなく酒の香がブンと匂つて来る、これは不思議だと其の匂ひを辿つて捜して行くと、やがて岩の隙間から酒がブク／＼泉になつて湧いて居るのが見付かつた。爺さんは天へも登る程喜んで、その後は毎日山へ登り、婆さんには内緒で、一人こつそりと其の酒を飲む。初めの間は手で掬つて飲んで居たけれども、後には口を付けてがぶ／＼と、酒の泉を飲み干す事さへもあつた。

婆さんは、爺さんがお錢おせんもない癖に毎日お酒に酔つて、御氣嫌で歸つて来るのが不思議で不思議でならなんだ。

ある日婆さんは何か思ひ當る節つむぎがあつたと見えて、こつそり爺さんの後を尾けて行つた。そんな事とは知る由もない爺さんは、その日も山へ登つて仕事もせず泉の端に坐り、舌鼓を打つて酒を飲んで居るのを樹陰の間から覗いて見て居た婆さんは、初めて爺さんの秘密を見付けてしまつた。爺さんだけが一人美味いお酒を飲んで、毎日管を捲くのに閉口して居た婆さ



んは、爺さんが山から下るのを待ち構へて其の泉の中へ小便をして置いたので、それからもう其の不思議な泉から酒が出なくなつてしまつた。今其の泉のあつた所を酒生澤さかひよざわと稱んで居る。

### 初澤の皇泉

むかし川路村のある百姓がお伊勢様へ參詣しての歸り道、宿屋の二階で寝て居る所へ神様が夢枕に立つた、そなたの村に人の知らない靈泉の湧き出る所がある、歸つたならば早速捜し出して汲んで見よ、萬病に大そうな効驗がある、と云ふのであつた。その百姓は大へんに喜び、家へ歸ると直ぐに村中を捜し歩いた末に、靈驗あらたかな泉の湧き出て居るのを見付け出した。これが今の初澤の湯で、一名皇泉と稱んで居るのは神様のお告げのあつた爲めだそ

うである。

### 土佐守の一杯水

遠山卿の上村かどむら字下中卿の山中に、遠山家の落武者の死靈を祀つた毘沙門神社がある。その社の近くに泉があつて、清水が絶えず滾々と流れて居るのを、村の人たちは一杯水と稱んで居る。昔遠山土佐守が土民に追はれて此所まで逃れて來た時、頻りに渴を覺えたので水を欲しいと云ひながら木の枝で地面を突くと、其處から忽ちに清水が湧き出した。それ以來その水は今日に至るまで絶えず流れて居ると云ふのである。



## 鹿鹽の鹽泉

一四六

昔弘法大師が諸國行脚の途すがら、銀杏の杖で山坂百里の道を踏み分けながら大鹿村の山奥まで尋ねて來た。そして村人たちの貧しい生活を憐んで、手に突いて居た銀杏の樹の杖で岩の根元を突くと、不思議や佛力立ち所に顯れて、杖の穴から塩水が湧き出した。村の人々は大喜びで弘法様の前に跪いて拜み奉つた。鹿塩の塩水はその時以來今に至るまで、絶えず滾々と湧き出て居る。

## 佛様に關する話

### 木槌の薬師

會地村前原の木槌山の麓に昔木槌山觀照寺と云ふのがあつた。十二坊を有した大寺であつたが天正十年織田軍侵入の時兵火に罹つて丸焼けになり、其の後再興覺束なくして今では其の跡に二間四面の小さな御堂だけが建つて居る。此所の本尊薬師如來は三河國鳳萊寺山の薬師と昔からの兄弟であつた。然る所此のお薬師様、戦争のために寺を焼かれたので、焔の中を駒場の長岳寺へ逃げて行つた。歸らうにも家がないから其のまゝ長岳寺に居候して御座る。而しさすがに昔が懐しいと見え、春になると頻りに木槌へ歸りたいとお強請りなされるので、舊曆の三月八日には五色の旗をたて、道中賑かにお送り申し、七日の間は木槌に御逗留、そして又長岳寺へお戻りになるのだそうである。

長岳寺の本尊様は元來觀世音であつたのに、木槌の薬師がお越しになつて以來、今では此の



薬師の方が幅を利かせて居るやうである。

### 山の寺の小佛様

山吹村の追ひ分から西山の方へ登つて行くと、お不動様の小さい祠があつて、その近くに大きな岩が二つ並んでゐる、その岩の上の方に穴があつて、山の寺（隣政寺）の小佛様は此の穴の中からお出ましになつたのであつた。

今からざつと三百年も昔の話になるが、向ひの河野村の或る百姓が、ふと河西を見ると、山吹村の山の中腹の所で怪しい光り物がする、而かもそれが毎日同じ場所、同じやうに光るのが不思議であつた。そこでその百姓は大いに怪しみ、友達を誘つて一しよに其の光り物をする山へ登つて行つた、そして此處らと思ふあたりを捜して見ると、大きな岩と岩との間に

有難い小佛様の御姿の光つてゐるのを発見した。これは勿體ないと百姓達は三拜九拜して、早速山の寺へお連れ申してお祀りしたのが今の山の寺の小佛様である。

### 佛手庵の由來

山吹村字小沼の佛手庵は伊那順禮二十九番のお札所で、木彫りの片手が木尊様に祀つてある。

寶曆頃の話であつたと云ふ、山吹村に源助と云ふ貧しい百姓があつた。父に死別して母への孝養も思ふに任かせないので、江戸へ出て一と稼ぎしようと、僅ばかりの路銀を工面し、知る邊を頼つて芝山内の増上寺へ寺男に住み込んだ。そのうちに世話する者があつて銀座へ奉公替へをし、職人になつて働いて居るうちに、或る日朋輩たちに誘はれて吉原へ遊びに行つ



た。その時の勘定の錢に刻印がなかつたので不審が掛かり、卽座に縛られた。厳しい吟味の末に明輩の者たちはお仕置になつてしまつたが、源助だけは増上寺からのお頼みもあり、又全く事情を知らない事が分つて放免になつた。

浮世の無常をしみじくと味はつた源助は發心し、増上寺で得度を受けた。朝夕の念佛唱名に一心になつて朋輩たちの菩提を弔つて居たが、せめてもの願ひに江戸へ一寺の建立を思ひ立ち、托鉢して貯めた僅ばかりの金を路用にして、久し振りで故郷へ歸つて來た。山吹のお殿様は源助のこの奇特な志を賞め、丁度その頃無住で居た大島村の秋岳寺を源助に下さつた。

源助は大いに喜び、早速そのお寺を取り崩し、小沼で筏に組んで天龍川を下し、本尊一丈六尺の五智の如來様を江戸表へ運んで行つた。その時どうした機會はつきか如來様の片手が小沼に落ちたまゝで居つたのを、程經て村の百姓が発見した。勿體ないと其の場へ俄づくりの小屋を建て、安置して置いたのを、お殿様が別に立派な御堂を建て、其處へ遷し奉つたのが此の佛

手庵である。

## 蓮 佛

山吹村の隣政寺にある蓮佛の話。昔山吹の領主で大へんに佛教に凝つたお殿様があつて、毎日缺かさず隣政寺へ參詣に行つた。或る日平常の通り佛壇へ香華を手向け、一心に禮拜して居るうちに、頻りと睡氣がさして來て、ついうとくと眠つたかと思ふと、眼の前へ金色の如來様が現はれて

『そなたは甚だ奇特な奴ぢや、その心に愛で、今此處へ四體の佛を授ける、ゆめ／＼禮拜を怠るまいぞ』

と云ふお告げであつた。殿様はびつくりして眼を醒まし、そして須彌壇の上を見ると、其處



に手向けてあつた蓮の實の小さい穴から四體の佛様が現はれて居つた。それを見た殿様は如来様のお慈悲に感激し、頭を疊にすり付けて九拜した。俗に蓮佛と稱んで居るのが即ち此れである。

### 一生に一度の一と言観音様

會地村駒場の淨久寺にある一と言観音様は大へんにあらたかなお観音様で、一度御利願ごりくわんをかけると如何いかな病氣でもきつと治して下さる。あまり勿體ないので一生一度のほかは願ねがひがけをしない事になつて居る。それ故俗に此れを一と言観音様と稱んで居るのである。

昔八幡太郎が奥州征伐の途中、馬に跨がり、御坂峠を越えて、逢地の關所へさしかゝつたが、相憎くお關所通行の手形を都へ忘れて來たので關所が通れない。さすがの太郎も少々困り

しばらく何か考へて居たが、やがて一策を案じ出し

信濃路に通ふ心はありながら

さもそ逢地の關はわびしき

と云ふ古歌を口誦さみながら、守本尊の觀世音を兜の中から取り出して關守の眼の前へ差し出した。有り難い觀音様のお像からこの時御光がバツと射すと、關守の眼が眩んで地べたにひれ伏した。その間に太郎は馬上ゆたかに關所を通り過ぎた。今淨久寺に鎮座しますと一言観音様は即ち此の時の八幡太郎の守本尊だと云ふのである。

### 横すら薬師

生田村の部奈へ行くと石で彫んだ横すら薬師が道側の丘の上に祀られて居る。厄病には大そ



う御利益があるとの話。もと此れは溝澤にあつたもので、昔遠山様が大河原で百姓一揆に殺された時、御供のお醫者の何がしと云ふ者が逃れて此の村へ来て住まつて居た。丁度その頃其處に大へん厄病が流行つたので、其の醫者は村の者と相談し、お薬師様の像を石へ彫つて溝澤へお祀した處が不思議にも厄病がばつたり熄んだ、それでお薬師様は大へんな評判になつた。或る年大水出がして山が崩れ、お薬師様も土と一しよに流されて行く衛不明になつてしまつた。その後部奈の百姓達が田普請をして居ると、かちりと鋤の先きにあつたものがある、掘り出して見るとしばらく紛失して居たお薬師様だつたので村中大喜び、早速今の處へお祀り申して横すら薬師と稱んで居る。

### 殿様の眼を治した十二薬師

鼎村名古屋の運松寺に十二薬師の一つがお祀りしてある。昔此處の御領主様が眼を患らつて此のお薬師へ御利益をかける。満願の夜に如来様が夢枕に立つて、近郷十二個所のお薬師様に祈願をすれば、眼病はきつと治してやる、と云ふ。殿様は大そう喜び、直ちにお告げの通り近郷の十二薬師に祈願をかけると眼病は立ち所に平癒した。殿様はその御禮に十二薬師の祭禮を賑やかに取り行つた。

その後織田の軍勢が亂入に及んで此處へ火をかけた時、如来様の御利益で忽ちに火が消え、お寺は幸にして助かつた。靈驗のあらたかなお薬師様で、若し少しでも粗末にする者があれば立ち所に御罰があたると云つて居る。



## 眼病のお参りする六地藏

一五六

昔目くらが六人、杖を突いて神原村の向方むかたを通りかゝつた。相憎の大雪で行くことも戻ることも出来なくなり、とう／＼六人が手を取り合つたまゝ、峠の途中で凍へて死んでしまつた雪が解けてから漸やく見出した村の人たちは、可哀相なことをしたと六人を一しよに懇ろに葬つた上に、六地藏を建て、六つの魂を祀つてやつた。この六地藏は眼の病氣にあらたかな効験とくしがあると云つて参詣する人がなかく／＼多い。病氣が治るとそのお禮には六本づゝの杖を奉納することになつて居る。

## 火事の中から逃げ出した熊野本尊

和田村木澤の熊野神社は紀州熊野の分れたと云つて居るが、御本尊は正しく釋迦如來の木像である。むかし御神殿が火災の節、本尊様は御自分一人で火の中を逃げ出した。それとも知らぬ百姓たちは、たゞあれよく／＼と噪ぐばかり、殆んど手の下しようもなく、唯本尊様のお焼けなさつたのを勿體ない事をしたと悲しみながら、鎮火するのを待つて居た。そのうちに百姓達は、何時の間にか逃げ出して、石の上に笑つて御座る本尊様を見付けて、たゞ／＼有難や有難やと涙を流して伏し拜んだ。今でもその本尊様は其の時全く御自分一人で火の中から逃げ出したのだと思つて居る。

## 行人様の話

且開村新野の瑞光院の行人様ぎやうじんと云へば、木乃伊みいらで誰知らぬ者もない程有名な話になつて居る

一五七



昔新野に貧しい百姓があつて、男の子一人を後に残して兩親共に死に失せた。残された孤兒は寺の和尚の情けで寺へ拾はれ、寺男になつて忠實に働いて居た處、朝夕和尚の有難いお經を聞いて居るうちに佛様の有り難さをしみぐと感じ、自分も佛道に入つて亡き兩親の菩提を弔ひたいとの一念發起し、和尚の許しを得て念佛の行者となり、手には鐵の杖を携へ足には鐵の下駄を穿き、諸國の高山靈場を巡禮してひたすら佛道の修業に勤めた。老後に至つては全く五穀を絶ち、木食によつて四方を廻國して歩いた末に飄然として故郷へ歸つて來た。そして山の上へ登りながら『これからわしが五穀豐饒の祈禱をして進ませませう。鉦の音が止んだなら山へ來て見なさい』と云ふ。それからして後、暫らくの間は鉦の音が朝夕山の頂きから聞えて居た。やがて人達が忘れてしまつた頃には山の上の鉦の音も止んで、知らぬ間に長い日が経つた。そのうちに氣附いた者があつて山へ登つて見ると、行人様は鐵の下駄を穿き、鐵の錫杖を持つたまゝ、五體全くお舍利になつて居た、見れば下駄の齒は穿き減り、足の指の跡さへ窪んでついで居た。貞享四年九月の頃の事であると云はれて居る。法號を心宗行順信士と云ふ。

ある年、町へ此の木乃伊を持ち出して見せ物にした事があつた。するとそれを擔いだ人足達が皆揃つて厄病に罹つたので、それは行人様の御崇りに違ひないと云ふ事になつた。

## 火定様の話

むかし番木村の富田へ何處からともなく巡つて來た一人の年取つた坊様が、荒れ果てた無住の草庵を雨宿りにして、お念佛を唱へるようになってから、大へんに長い時が経つた。村の人たちは、山の上から聞えて來る鉦の音を有難がり、名前もよく知らぬ此の坊様を大智識と仰いで信向する者が多かつた。



眉が雪のやうに白くなつた山の坊様が、定命を悟り、火定くわいぢやうに入つて往生を遂げようと決心した事は誰も知らなんだ。人には告げず、ひそかに拾ひ集めた薪は日々に積んで山を築いた。用意が萬端整つた時、坊様は初めて火定の話を村の人たちに知らせてやつた。村では此の知らせを聞いて寝耳に水のやうに驚いた。何か村に不吉の來る前兆で、もあるやうな氣がして皆山の方角を恐るゝ仰いで見た。中には『氣違ひ坊主』と罵る者もあり、中には山へ駆け上つて、法衣の袖に取り縋つて止めた者もあつた。しかし坊様は何と云はれても聽かなんだ。『七日の間は此のまゝにして置いて、その日が経つたなら灰を集めて葬つて呉れ』と云ひ遣した。

やがて火定の日となつた。白い煙が薪の山の四隅から立ち昇る。村の人たちは顔も上げ得ず地にひれ伏して、ひたすらお念佛を唱へてゐた。紅蓮の焰に包まれながら、端然と胸のあたりちやくに合掌したお坊様の姿は、かすかに聞える南無阿彌陀佛の聲と共に、又とない神々かまくらしさであつた。

遺言の七日が、あと一日と云ふ時になつて大雨が降つた。人たちは其のまゝ捨て、置くのに忍びなくて、雨の中に火定様の灰を掻き集めた。

其の跡を今火定平と稱び、火定様を信仰する人たちは今でもお祭りをして居るそうである。

### 和仁が淵から出た觀音様

龍丘村時又の長石寺にある觀音様は行基菩薩の作だと云はれて居る。むかし泥棒がそれを盗み出し、抱へて逃げようとする、その小さなお像が遽かに重くなつて動けない、お寺の方へ向くと軽くなり、その反對の方へ向くと重くなる。泥棒もさすがに恐ろしくなつたと見え、それを天龍川へ轉がし込んで置いて逃げ去つた。



その頃下流にあたる泰阜村の明島あけじまに、何がしと云つて極めて信神深い人があつた。ある夜お観音様が夢枕に立ち、和仁が淵の水底に沈んで居るわしを救つて呉れと云ふ。その人は不思議に思ひ、翌朝いそいで和仁が淵へ行つて見ると、水の底からちか／＼と御光が射して居る。早速引き上げて見ると世にも有難い觀世音菩薩であつたから、すぐに長石寺へお返へし申した。丁度その時、その家では家普請が始まつて居た、ところが水の中からお観音様をお助け申したその夜、不思議にも何處からか澤山の材木が庭一ぱいに運んであつた。而かもそれは鳶口の跡などが一面について居た。それは長石寺のお観音様がお禮のために運んで来て下さつたのであつた。その家では大へんに喜び、その材木を使つて家を建てた。それで今でも其の家の柱や梁には鳶口の跡がそのまゝに残つて居るそうである。

## 日切り地藏

座光寺村から下市田へ行く其の路傍に日切り地藏様が祀つてある。萬病を治すと云ふので一と頃は大へんに流行つたものであつた。病人が今日から何日までと日を限つて願ねがをかけるをかけると、その期限の中に必ず快よくなると云ふので日切り地藏と名が付いた。もとは畑の中の野天に雨曝しになつて居たのが、右のやうな御利益ごりやくのために、信者からはお堂も建て、貰ふし、お賽錢もあがるし、寄進の大旗小旗で一時はなか／＼景氣がよかつた。

すつと昔、下市田の北はづれ、天龍川の川端に一人の貧乏な男があつた、親も子もないひとりぼつちで、日傭人足にたのまれて村中を彼方此方と渡り歩いて居た。ある年の秋、重い病氣に罹り、親切な近所のお婆さんの懇ろな介抱もその甲斐がなく、とう／＼死んでしまつた。死に際に遺言して



『俺が死んだらどうかお地藏様に祀つて呉れ、その御利益で病氣で苦しむ人たちを救つてやりたいから』と云ふ。

村中の誰彼が氣の毒がつて、やがて遺言どうり小さいお地藏様を石に刻んで祀つてやつた。去る者は日々に疎しと諺にあるやうに、お地藏様は村の人たちからすっかり忘れられたまゝになつて、幾年も幾年も草ばかの中に轉がつて居た。すると或る年のこと、その近所に大病人が出来た、醫者の藥も御祈禱も更に効能がなく、もう死ぬばかりになつた。所がその夜草の中のお地藏様が夢枕に立つたので、夜の明けけるのを待ちかねて、畑の隅に荒れ果てたお地藏様を見付け出し、おひねりを上げて三十日の願をかけた。すると不思議にも十日の後には死んだやうな病人がむく／＼と起き上つた、二十日經つと杖を突いて歩くやうになつた、三十日の満願には自分でお地藏様へお禮参りが出来るやうになつた。斯う云ふ御利益はその他にも澤山にあつた。此方では甕の腰が立つた、彼方では盲者の眼が開いた、と云ふやうな評

判が八方へ廣がつて、それからして日切地藏様は大へんに流行るやうになつたのであつた。

### 桂泉院の白龍

高遠町東高遠の桂泉院はもと法堂院と云ひ、お城の中に在つて殿様の祈願所になつて居た。住職の廣琳和尚は高德の僧で、四方から佛弟子達が集まつて来るが、場所が城中の事として出入りが六つかしく、不便甚しかつたので、和尚は籠ヶ澤へ出て庵を結び、此處を假りの住居として居つた。ある夜和尚の枕許へ白髪の老人が現はれて、有難い戒法を授けて呉れと和尚に頼む、和尚は喜んで早速にそれを授けてやると、老人は忽ちに白龍に變つて池の中へ消えて行つた。その時其處へ泉が出来て、美しい清水が滾々と湧き出るやうになつた。此れが即ち桂井の水である。



お殿様はその話を聞いて大へんに感心し、早速法堂院を城内から此の地へ移して寺號も龍澤山桂泉院と改める事になつた。

序に附け加へて置く事は、此の寺の梵鐘はもと下伊那郡川路村開善寺のものであつた。天正十年織田の軍勢が下條口より伊那へ侵入した時、此の釣鐘をはづして陣鐘に用ひ、とう／＼此處まで擔いで來て此の寺へ置いて行つたものである。『信苧伊那郡上川路壘秀山開善寺文和乙未四年八月六日云々』の銘がある。

### 錢 不 動

南向村の大草に昔菖蒲沼と云ふ古池があつた。ある日百姓が其の畔を通りかゝると、何處からか微かに鐘の音が聞えて來る。耳を澄ましてよく聞くと、それが水の底から響いて來る事

が分つて評判になり、村中總出をして池を浚へて見ると、中からお不動様の木像が現はれて來た。これは勿體ないと早速其處へお堂を建て、お不動様を本尊にお祀りする事になつた。靈驗がまことにあらたかで、殊に馬には此の上もない御利益ごりやくを下さると云ふので、遠近を問はず馬を曳いて參詣に來る者が多い。

### 護國寺の地藏様

東春近村中殿島の護國寺にある脇立地藏は、もと駒ヶ岳の麓の地藏平にあつたものであるが、寛文の頃との話、それを高遠城へ勸請しようとして此處まで運んで來た所、どうした事か此處で急に磐石の如く重くなつて動かない、致し方なくお殿様に願ひ出て、此處の寺に安置することになつたものである。惠心僧都の御作と稱せられて居る。



## 日蓮の經石

三義村荆口の弘妙寺の什寶に日蓮上人の曼陀羅經石と云ふがある。

文永年中との事、甲州石和村の漁師鵜飼勘作と云ふ者が殺生罪によつて石和川のはたで殺された。その怨靈が何時までも石和川に残り、毎夜のやうに火の玉になつて川原をさ迷ひ歩くので、夜になると恐れて通る人もなくなつた。日蓮上人此の事を聞き、迷へる魂を救つてやろうと思召し、小石に經文を書いてそれを川の中へ投げ込んだ。それ以來勘作の亡靈も鎮まつたと見えて火の玉は出なくなつた。その後此の地に鵜飼山遠妙寺と云ふ寺が一つ建たることになつた。弘妙寺にある經石は、此の寺の住職の日迎が遠妙寺の近くへ轉住した時、此の礫石を手に入れて弘妙寺へ寄進したものだと言ふことである。

## 蛇婚の話

三輪山式神婚傳説として廣く諸國に分布して居る物語、此れは加茂と三輪との二個所の玉依姫の古傳が最も古い話であつた。加茂の神の御娘、玉依姫がある日瀬見の小川で遊んで居ると、丹塗の矢が川上から流れて來た、此れを拾ひ來つて床の邊に挿して置いた所、その矢、毎夜美男と化し來つて姫に添ひ、姫は忽ち此れに感じて身籠り給ひ、やがて男子を生んだ。今の上加茂の社の御神別雷神は即ち此れであると云ふ。

三輪神話に依れば三島湊の娘に何がし毘賣と云ふ美人があつた。三輪の大物主神が此れを見そめ、丹塗の矢になつてその美人の家の溝へ流れて來た。その娘これを拾つて床の側



に置くと、その矢が美しい男になり、忍び來つて娘に添ひ、娘はやがて一人の美しい女の子を生んだと云ふのであつた。此の女の相手になつたのが池のヌシ、蛇の化身であつたと云ふ話に至つては、多くの類似を以つて各地到る所に多く語り傳へられて居る所であつた。

### 矢野の大池の主

且開村の矢野に昔何がしと云ふ庄屋があつた。その庄屋の一人娘、器量がよいので村中の評判であつた。もう年頃になつたので、村の若い者たちはてんでに自分の物にするやうなつもりで、娘の家の周りをさ迷ひ歩く者さへも多かつた。

かゝる折から何處の家の者とも知れぬ美男が一人、ある日庄屋の家へ訪ねて來た、それが縁

となつてそれから後、夜なく／＼忍んで娘に逢ふ日が幾日もつゞいた。何處から來て何處へ歸つて行く男かと、娘は怪んで尋ねるけれど、それに就て男は一と言も云はなんだ。逢ふ日が重なつて娘は何時か身重になつて居た。

好む男の素性の知れないのが娘の大きな悩みの種であつた。娘の暗い顔を見咎めた母親は、ある日娘にそのわけを尋ねたので、娘は此れまでの一伍一什いちごしじゅうを母に物語つた。母は驚いてすぐさま巫女みこをたのみ、娘の身の上を占つて貰ふと魔性の物の仕業だと云ふ、毎夜忍んで來る道筋へ針を植えて置けと教へる。その夜庄屋の家では巫女に教へられた通り男の通ひ路に何本も針を立て、置いて、そして翌朝行つて見ると其處に大きな鱗が一枚落ちて居た。男はその夜限りに來なくなつた。

それから二三日経つての事であつた。村の獵師が大池の端を通りかゝると、樹の根元に一匹の大きな猪が眠つて居た、硯いしひを定めて撃つてやると確かに手應へがして猪は大池の中へ飛



び込んだ。すると忽ちにして池の水が眞赤に染まり、幾日経つても澄む様子が見えぬ。それから又數日の後、その獵師が再び大池の畔を通ると、水底の方に當つてひそくと話し合ふ聲が聞える、泣いて居るらしい聲さへも洩れて来る。獵師がじつと耳を澄ますと

『父さんは猪の姿をして獵師に撃たれ、そなたは矢野で針に刺されて迎も生命は助かるまい、大池のヌシの血筋もそなたで後が絶へるかと思へば、それが残念でならぬ』と云ふ。

『母さんは其のやうに歎くには及ばぬ、たとへ私は針の毒で亡くなつても、矢野の家へ子供を残してあるからヌシの血筋の絶へる心配はあるまい』と答へる。

矢野の庄屋の一人娘の許へ夜なく通つた魔性の男が此の大池のヌシの子蛇であつたことが漸く知れて獵師はびつくりした。早速矢野へ駆け着けて此の由を注進に及んだので、庄屋の家では皆腰を抜かして驚いた。やがて娘が産氣づき、醫者を呼んで産ませて貰ふと、果して幾筋もの小蛇が生れて來た。

ヌシの亡くなつた大池は水が涸れて小さな沼になつた、その下を流れる大村川には日に三度づゝヌシの血が流れて來ると云ふことである。

## 鰐が淵

矢野の話と同じ話が又秦阜村でも語られて居る。

秦阜村明島の鰐が淵には昔大きな蛇が住んで居た。その頃その村に母と娘の二人暮しの家があつて、それが年頃の美しい娘であつた。然る所其の娘の許へ夜なく通つて來る見馴れぬ奇麗な男があつた。日が暮れると何處からともなく忍んで來て明け方になると何處へか歸つて行く。娘が男に家を尋ねても、そればかりは聞いて呉れるなど云ふ。不思議に思つた母親は、ある夜ひそかに糸と針とを用意して男の歸りの頃を計り、そつとその袂に針を差して



置いた。その翌朝、母の手許に残る糸を辿つて尋ねて行くと、糸は正しく鰐が淵の中へ曳いて居る、それで初めて毎夜忍んで来る美しい男は此の淵のヌシの化身と云ふことが知れた。

淵の中では親蛇が子蛇に諭す話し聲が聞える。親の戒めを破つて忍び歩いた罰で、お前ももう長い生命はあるまいと云ふ。針の毒は何よりも恐ろしい、間もなくお前は死なねばなるまい、と云つて歎く。すると子蛇の聲で、たとへ自分はこのまゝに死んでも自分の胤は残してあるから、その様に歎くこともあるまい、と云ふ。

やがて娘は月満ちて産をした、生れたのは蛇の子ばかりで、それが盥に七杯半もあつたと云ふ。

この淵には此の他にも例の椀貸しの話しが傳へられて居る。

## 成瀬が淵の女

此れも泰阜村にある話。

田本の何がしの家に昔一人の美しい召使ひの女があつた。どう云ふわけか暇さへあれば井戸端に立ち、水に映る己が姿に眺め入るのが常であつた。その頃其の女は己に主人の胤を宿して居た。

ある日、女は常のやうに井戸を覗いてじつと水の中に映る自分の姿を眺めて居た、その日は女の顔に何となく悲歎の色があつた。しばらくは井戸の中の己が姿と何事か語り合つても居る様に思はれたが、やがて黒雲が空一めんにはびこると見る間に遽かに大雷雨となつた。

眞つ暗く降りしきる雨の中に稻妻が走つて、その間に女の顔がちらと見えたまゝ、女の姿は何處へか掻き消すやうになつてしまつた。



その事があつて數日経つた或る夜のこと、行く衛知れずのその女が主人の夢枕に立つた、  
『何時までも此の身を不憫と思ふて給はるなら、遠江國成瀬の淵の岸へ来て、大きくわが名  
を呼んで下され』と云ふ。

不思議な夢の告げに、その家の主人は怪みながらも氣に懸かるまゝに、女を尋ねて遠江國へ  
下つた。して捜し當てた成瀬が淵の岸へ来て、云はれたまゝに女の名前を紙に記して淵へ  
沈め、大きく女の名を呼んで見た、すると忽ち岸邊に美しく其の女が現はれて来て、二人  
は不思議にも此の淵の畔でめぐり合つた。二人がやがて分れる時、女は男に暫らく後の方に  
向いて居て、水の中へ歸つて行く私の姿を見て下さるな、とたのむ。

男は云はれるまゝに暫らくは後に向いて居たけれども、心元なさにそつと振り向くと、十二  
本の角に波を掻き分けながら、見るも怖ろしい大蛇の姿が金色の鱗を閃めかして淵の底へ沈  
んで行つた。

田本の里にはそれからして凶事ばかりが続いた。村の人たちはヌシの崇りを恐れ、蛇の姿を  
石に刻んで神に祀り、毎年盛なお祭りをしてその靈を慰めるやうになつてから、蛇の崇りは  
幸にしてなくなつた。

### 清内路の蛇塚

むかし美濃國岩村のお城に小さいお姫様があつた、そのお姫様が廁へ行く度ごとに小蛇が一  
匹何時でも尾いて來た。乳母は戯談じよくだんに其の蛇に向ひ『お前が何時でも汚れ物のお掃除をして  
呉れるなら、やがてはお姫様をお前に進ぜよう』と約束した。

お姫様は年頃になつて飯田のお殿様と縁談がまとまつた。お輿入れの當日、美濃から飯田へ、  
峠十里の間はお姫様の行列で賑つた。ところが彼の小蛇は昔の約束を忘れずに、矢張りその



行列のお供に尾いて飯田へ来てお姫様に着きまどつて居るので、折角の縁組も破れてお姫様は再び美濃へ歸ることになった。

可哀相なお姫様はお駕籠へ乗る時澤山の針を用意した。そして窓の隙間から途々その針を撒きながら道を急がせた。そんな事とも知らぬ小蛇は矢張りお駕籠の後を戀つて追ひかけて来た。そして山本から清内路へ越す峠路に差しかゝつた頃には、道に撒かれた無数の針が腹に刺さつて鐵氣の毒が體中に廻り、遂ひ此の峠の途中で鮮血に染まつて死んでしまつた。

村の人たちは蛇の祟りは恐ろしいと云つて懇ろに葬り、社を建て神様に祀つて蛇塚と稱んで居る。

## 沈鐘の話

### 文永寺の釣鐘

下久堅村字南原の文永寺は、其の昔、神峰城主の知久信貞が文永年中に創立したもので、隆毫上人を開祖とする眞言の古刹である。山城國醍醐理性院の末寺で、歴代の天皇御歸依淺からず、屢々御宸翰を賜はつた。下つて戰國時代に至り、武田晴信又篤くこれを尊信し、只今寺寶の中にも晴信自筆の書翰などがある。此の寺の脇にある石室と、その中に在る石塔とは共に弘安六年の作で、以前は俗に『切石様』と稱ばれ、子供の遊び場所になつて居たが、今では國寶に指定せられて居る。其の他貴重の寺寶の多數ある中に、其處の鐘樓に吊された梵鐘には古來いろ／＼の物語りが傳へられて居る。